宮城県文化財調査報告書第 168 集

大畑遺跡ほか

平成７年３月

宮城県教育委員会

序　　文

宮城県には、現在約5,600カ所の遺跡の存在が知られています。これらの遺跡には、旧石器時代以来各時代にわたって築かれた祖先の歴史が刻み込まれています。このようなかけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達にとって重要な責務であると考えます。

近年の文化財を取り巻く状況をみますと、従来の経済優先に対する反省から、物資のみならず精神的・文化的な面を大切にしようとする価値観の転換がなされつつあるのは、すでに私達の知るところであります。こうした時代の趨勢にあって、文化財や歴史的環境を保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうとする気運が除々に高まる傾向にあることは、文化財保護思想のより一層の普及・啓蒙につながるものであり、まさに歓迎すべきことといえましょう。

しかし、一方では絶えることのない開発事業により、遺跡の多くは依然として破壊・消滅の危機にさらされているのが実情です。こうしたなかにあって、当教育委員会では遺跡の所在等について関係者への周知を図るとともに、協議整備を重ね、可能な限りの保存に努めているところであります。

本書は、開発関係機関等との保存協議に基づき、平成6年度に国道113号線バイパス建設に伴って実施した大畑遺跡ほか5遺跡の発掘調査の成果を収録したものです。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明に資するところとなれば大きな喜びであります。

最後に、遺跡の保存に御理解を示され、調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成7年3月

宮城県教育委員会教育長

鈴　鴨　清　美

目　　次

大畑遺跡 …… 1
町頭遺跡 …… 23
若宮遺跡 …… 29
大学町北遺跡 …… 41
台町西遺跡 …… 45
石堂Ｂ遺跡 …… 46

例　　言

1. 本書は、平成６年の国道113号線のバイパス建設に伴う宮城県白石市大畑遺跡、平成５年の国道346号線の歩道橋工事に伴う本吉町町頭遺跡、国道398号線の改修工事に伴う志津川町若宮遺跡他の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書における土色についての記述は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を利用した。
3. 本書の各遺跡の地形図は建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図「大河原」「白石」「白石南部」「白石東南部」「馬籠」「折立」を複製して使用した。
4. 本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の検討を経て、下記の者が行った。

   大畑遺跡―八嶋伸明　　大学町北遺跡―佐藤則之
   町頭遺跡―斎藤吉弘　　台町西遺跡　―佐藤則之
   若宮遺跡―斎藤吉弘　　石堂Ｂ遺跡　―佐藤則之
5. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、宮城県教育委員会が一括して保管している。
6. 大畑遺跡の調査における地区割り（グリッド）は、任意の基準杭（1.2）を設定し、直角座標をもとにして行った。

   基準杭１　Ｘ＝-221424.5　Ｙ＝-176686.0
   基準杭２　Ｘ＝-221427.4　Ｙ＝-176486.0

   なお、図中にある方位は、真北を表している。
7. 大畑遺跡の図版中のスクリーントーンは、遺構図中においては柱の痕跡、遺物実測図中においては内面黒色処理を示している。
8. 大畑遺跡の第10図の参考遺物は、白石市教育委員会の保管している遺物を借り受け掲載した。
9. 大畑遺跡の調査にあたって、次の方々に御協力・御教示を頂いた。（敬称略、順不同）

   菅原祥夫・石本弘・中橋彰吾・清野俊太朗・日下裕一郎・白石市教育委員会・株式会社平間組

大畑遺跡（おおはたいせき）

目　　次

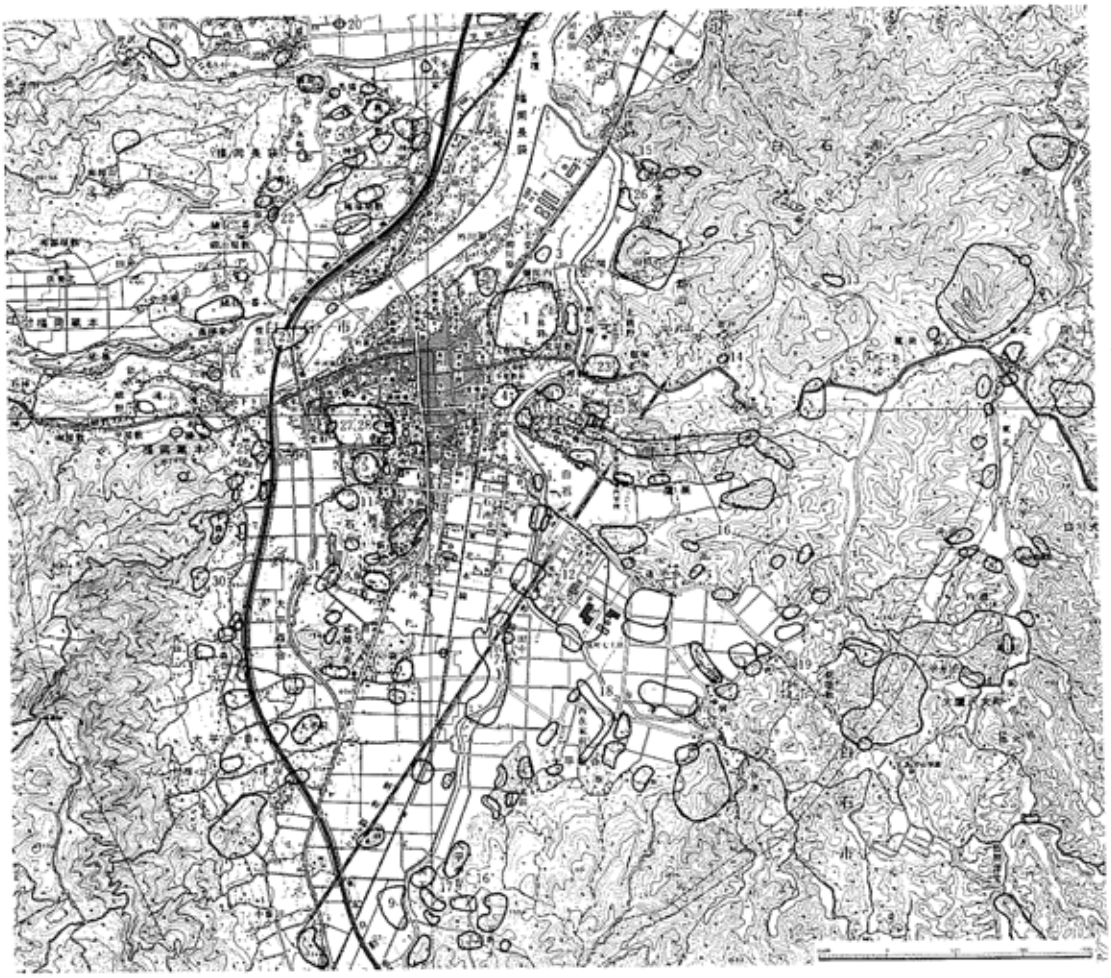
調査要項……2
第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第Ⅱ章　調査に至る経偉と調査の方法……4
第Ⅲ章　発見された遺構と遺物……6
①建物跡……6
a.掘立柱建物跡……6
b.礎石建物跡……9
②溝跡……10
③土壙……10
④その他の出土遺物……10
第Ⅳ章　考　察……12
第Ⅴ章　まとめ……15
写真図版……17

調査要項

遺 跡 名　：大畑遺跡　　おおはたいせき
宮城県遺跡地図（平成 5 年度版）遺跡地名表登録番号；02262
遺跡記号；ＯＢ
所 在 地　：宮城県白石市字東大畑　107 番地
調査期間　：平成 6 年 8 月 23 日～10 月 3 日
調査面積　：約 1650 ㎡
調査原因　：国道 113 号線の道路改良工事
調査主体　：宮城県教育委員会
調査担当　：宮城県教育庁文化財保護課
調査協力　：白石市教育委員会
調 査 員　：菊地逸夫・山田晃弘・八嶋伸明（宮城県教育庁文化財保護課）
調査参加者：大庭正助・遠藤周治・松野陽一・佐藤勝秋・佐藤敏男・星野喜雄・
四釜卓哉
遺物整理参加者：千葉栄子・馬場好江

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

大畑遺跡は白石市字東大畑に所在する。本遺跡のある白石市は宮城県内陸部の最南端にあたり、東部の阿武隈山地帯、西部の奥羽山脈と蔵王火山帯からなる奥羽山地帯、これらの山地帯に挟まれた中央部低地帯の三地域に分けられる。中央部低地帯は一般に白石盆地と呼称され、その中の北部を東流する白石川やそれに合流する斎川などの支流によって形成された南北に長い盆地状の低地で、南北約6.5㎞、東西約2.5㎞の規模をもつ。斎川は、盆地南部の山地中に源を発し、流域に自然堤防を形成しながら盆地南半のほぼ中央を北流、郡山地区で丘陵を避けて蛇行しながら白石川に合流している。本



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	大畑遺跡	弥生・古代	12	白石条理制遺跡	古代・中世	23	鶴島山遺跡	縄文・古代・中世
2	観音崎遺跡	古墳（後）・平安	13	鳥居横穴古墳群	古墳（後）・奈良	24	七屋敷遺跡	古代
3	弥陀内B遺跡	古代	14	上舘沢古墳	古墳（後）	25	両ヶ作遺跡	古代
4	本郷遺跡	古代	15	郡山横穴古墳群	古墳（後）・奈良	26	金倉遺跡	古代
5	穴山遺跡	縄文（中）・奈良・平安・中世	16	鷹巣古墳群	古墳・古代	27	白石城跡	古代
6	梅田遺跡	弥生・古墳	17	亀田古墳群	古墳	28	益岡遺跡	古代
7	田中遺跡	弥生・古墳・古代・中世	18	板谷古墳群	古墳・奈良	29	下舘遺跡	古代
8	北無双作遺跡	古墳・奈良	19	塔ノ入古墳	古墳（後）	30	内田前遺跡	古代
9	亀田西遺跡	古墳・平安	20	堂田廃寺跡	平安	31	前山遺跡	縄文・弥生・古代
10	亀田遺跡	古墳・古代	21	曽生田遺跡	縄文（前～後）・弥生			
11	八幡坂西遺跡	古代	22	入屋敷前遺跡	縄文・古代			

第1図　周辺の遺跡

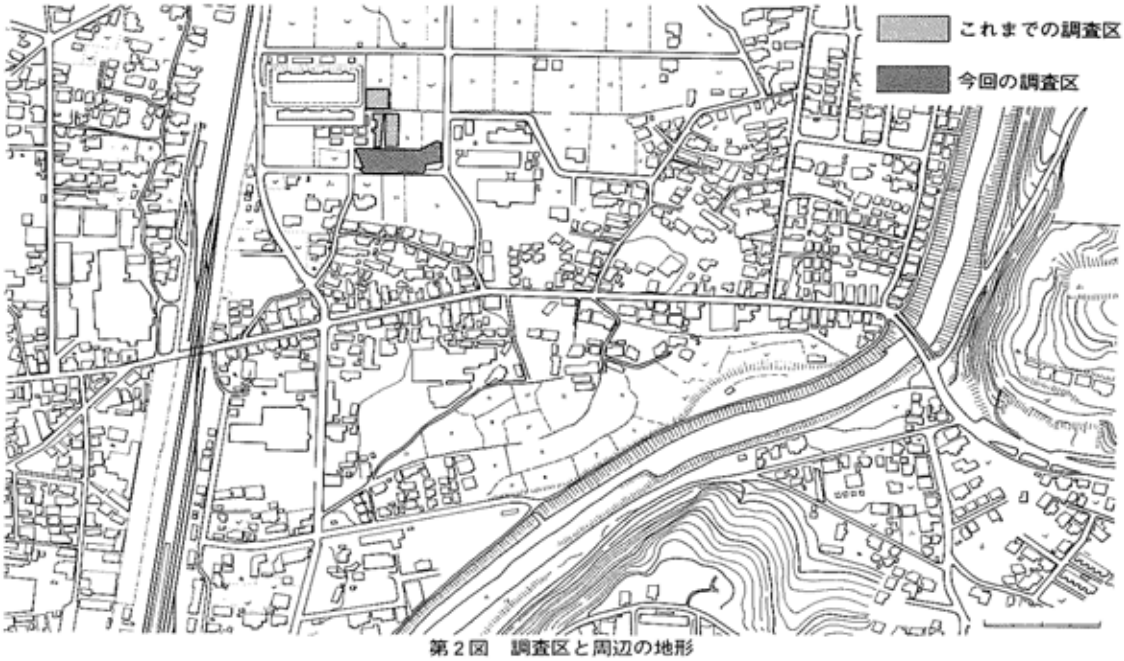
遺跡は斎川西岸の自然堤防上に位置している。遺跡のすぐ西側には東北本線があり、東側には住宅地を挟んで斎川が蛇行しながら北流している。現状は宅地・水田・畑地・道路敷である。

本遺跡のある白石周辺には、現在 400 ヶ所以上の遺跡が確認されており、県内でも最も遺跡の集中する地域の一つとなっている。以下盆地内の遺跡について概観したい。

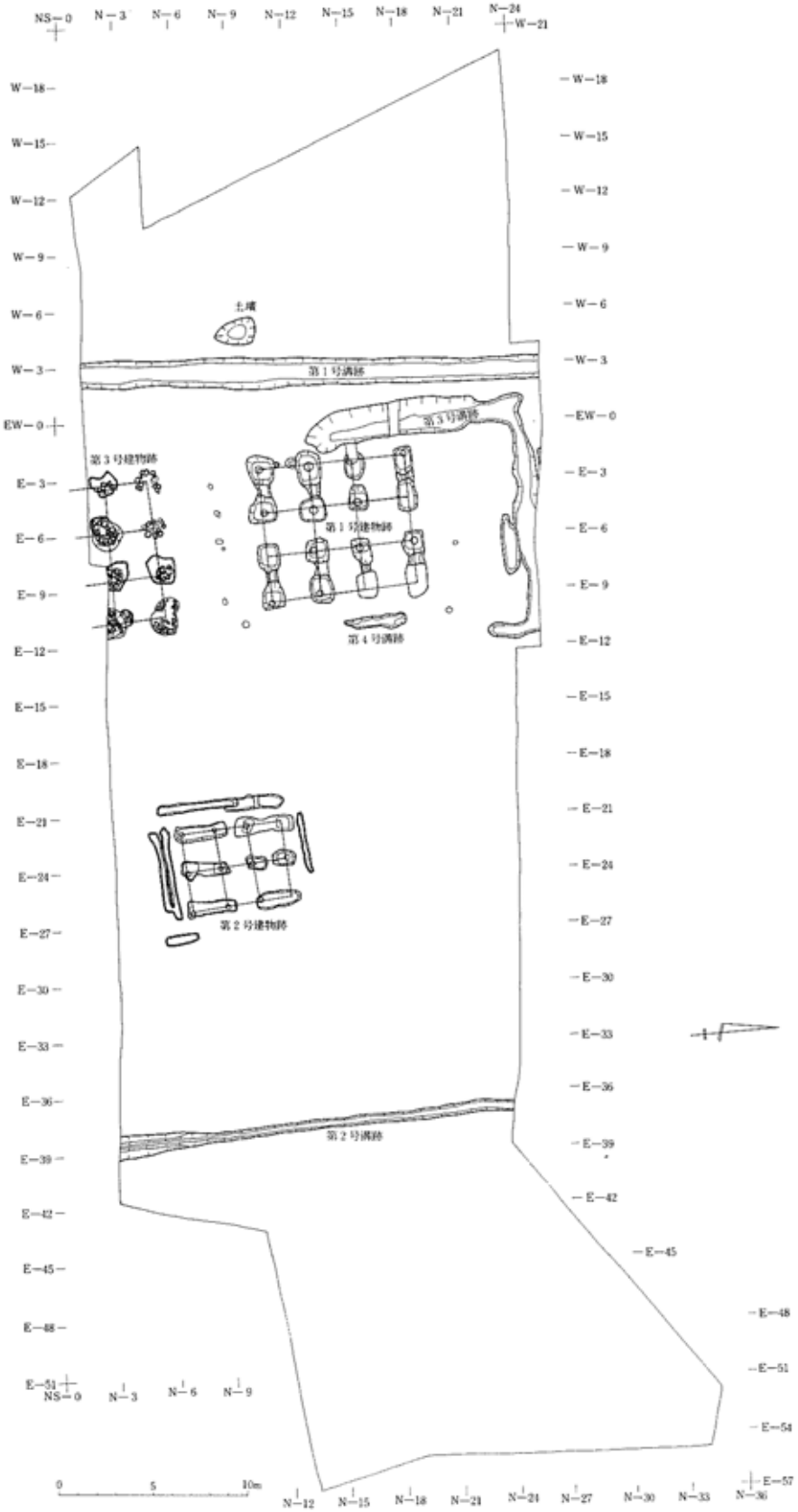
縄文時代の遺跡は 60 ヶ所以上確認されており、白石市北部の深谷地区に集中している。弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比して激減しており、同盆地内ではわずかに 8 ヶ所が確認されているにすぎない。それに比して白石市北部の円田盆地では集中している。古墳時代以降斎川流域を中心に遺跡の分布が認められ、集落跡としては、梅田遺跡、田中遺跡、亀田西遺跡、北無双作遺跡、観音崎遺跡、などが確認されている。さらに、斎川東側の阿武隈山地帯から派生した低丘陵には、鷹ノ巣古墳群や亀田古墳群などの中期・後期にかけての高塚古墳や、上蟹沢古墳、塔ノ入古墳、坂谷古墳群などの小円墳や、郡山横穴古墳群を中心とする横穴墓も存在している。これ以後も斎川流域地域には、ほぼ連続的に遺跡が密集している。白石市内には、兀山窯跡、前山遺跡、鹿島山遺跡、堂田廃寺跡など古瓦を出土する遺跡もある。本遺跡は、この様に遺跡の集中する斎川周辺の遺跡の一つである。

第Ⅱ章　調査に至る経偉と調査の方法

今回の調査は、国道 113 号線のバイパス建設工事に伴う事前調査として行われたものである。平成 2 年と平成 5 年に宮城県教育委員会によって、遺跡の範囲確定のための確認調査が行われており（近藤：1991)、今回は前回の確認調査で遺構の検出された範囲（中心杭ＮＯ.29～ＮＯ.32 の路線敷部分）約 1650 ㎡を対象として（第 2 図)、平成 6 年 8 月 23 日より調査を実施した。遺構は 3 層上面で礎石建物跡を検出し、他の部分については、さらに掘り下げを行い、遺構確認を行った。



第２図　調査区と周辺の地形



第3図　遺構配置図

検出された遺構は、すべて精査し、1／20 の平面・断面図を作成し、35 ㎜カラースライドおよび 6×7 白黒・カラー写真による記録を行った。調査区については、平板測量による 1／200 の平面図作成を行い、平成 6 年 10 月 3 日に調査終了し、その後埋め戻しを行った。

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

今回の調査では礎石建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 2 棟、溝跡 8 条、土壙 1 基が検出された（第 3 図）。なお、基本層序は以下のとおりである。

1 層　（1ａ.1ｂ）　現代の水田耕作土

2 層　灰色粘土質シルト層

3 層　黒褐色シルト層　遺構構築面

4 層　明黄褐色砂質シルト層

また、遺物は各遺構や表土から土師器、須恵器、円面硯、瓦などが出土した。以下、遺構・遺物を順に記していく。

①建物跡

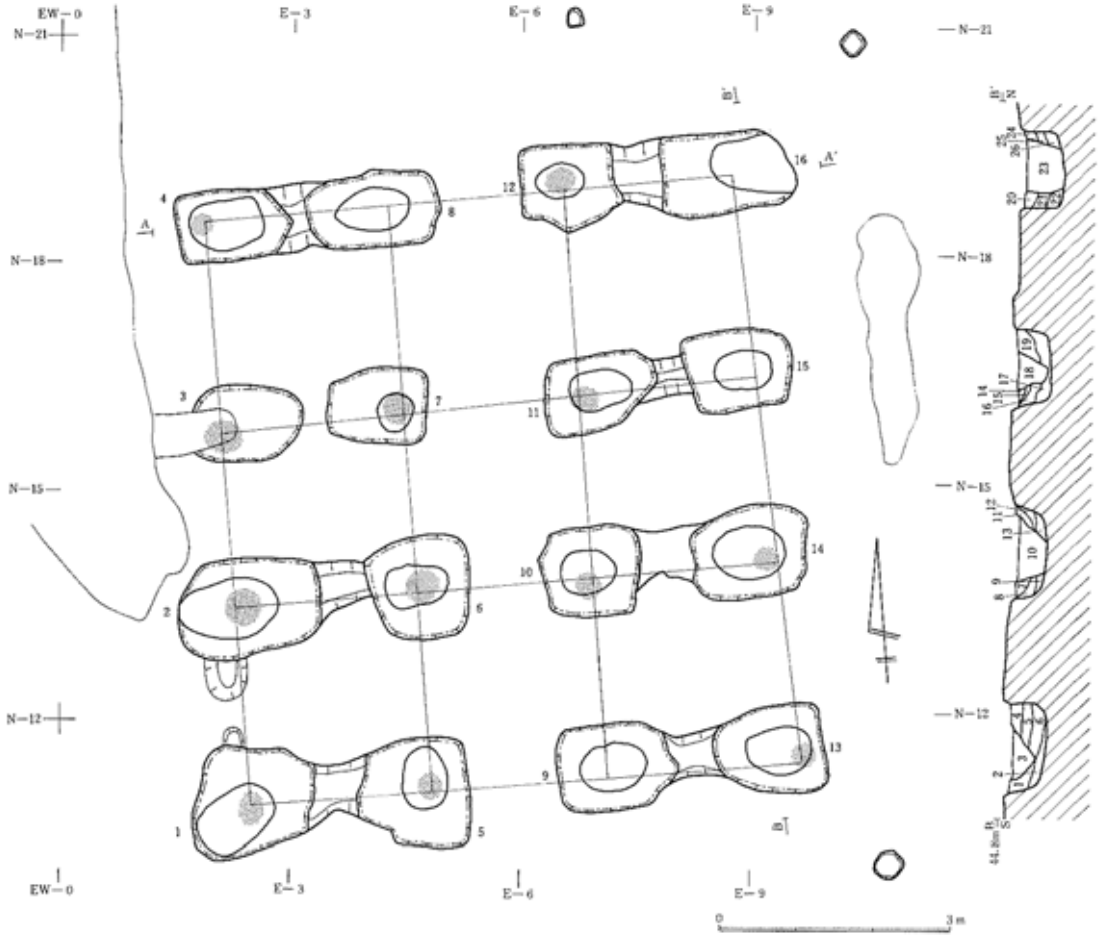
a.掘立柱建物跡

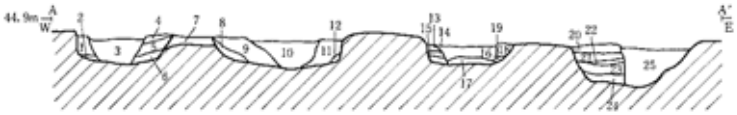
第 1 号建物跡（第 4 図）

調査区西側の 4 層明黄褐色砂質シルト層上面で検出した。梁行 3 間、桁行 3 間の総柱建物跡である。すべての柱穴で柱抜き取り痕跡が認められた。掘り下げたところ、P8・P9・P15・P16 を除いた柱穴で底面に円形に酸化鉄の付着した部分が認められ、柱の痕跡と考えられる。この痕跡から柱は円形で直径約 30 ㎝である。柱間寸法は柱の痕跡の中心の位置をもとにすると、梁行が北妻で東から約 2.50m・約 2.40m・約 2.45mで総長約 7.20m、桁行が東側柱列で南から 2.64m・約 2.40m・約 2.70mで総長約 7.70mである。建物の方向は真北より約 1°西に偏する。柱穴の形状は約 1.7m×約 1.5mの方形の柱穴が中央部分のみ、浅い溝で東西に二個ずつ連結し、鉄アレイ状を呈する。このことから、あらかじめ長方形に浅く掘りくぼめ、その後、柱穴の部分のみ深く掘り下げているものと考えられる。柱穴の深さは確認面から 30 ㎝～55 ㎝であり、連結部分の溝のみが浅く 1 ㎝～10 ㎝である。埋土は暗褐色のシルトと黄褐色の砂を交互に埋めている。出土遺物は土師器の細片である。なお、確認調査の際に柱穴の埋土から平瓦が出土している（近藤:1991）。

第 2 号建物跡（第 5 図）

調査区東側の 4 層明黄褐色砂質シルト層上面で検出された。梁行 2 間、桁行 3 間の総柱建物跡である。第 1 号建物跡の東側約 10.5mに位置し、第 2 号建物跡の北妻と第 1 号建物跡の南妻の柱筋が揃っている。すべての柱穴で、柱抜き取り痕跡が認められた。掘り下げたところ、P4 を除いた柱穴で底面に円形に酸化鉄の付着した部分が認められ、柱の痕跡と考えられる。この痕跡から柱はほぼ円形で直径約 25 ㎝である。柱間寸法は柱の痕跡の中心の位置をもとにすると、梁行が北妻で東から約 2.10m・約 2.15mで総長約 4.25m、桁行が東側柱列で南から 1.96m・1.72m・約 1.68mで総長約 5.22mである。建物の方向は真北より約 1°西に偏する。柱穴は棟通り P7・P8 は単独で掘り下げているが、他の柱穴

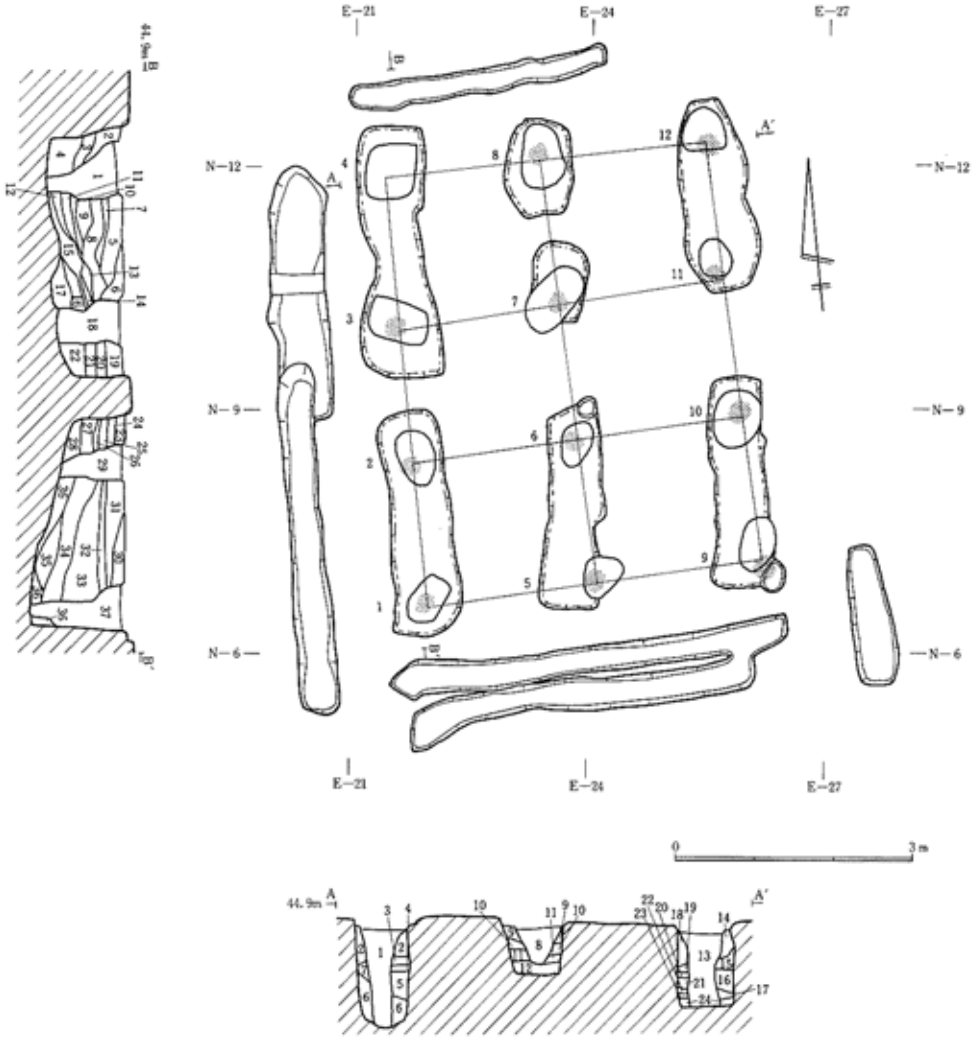




層No.	土色	土性	特徴	層No.	土色	土性	特徴
1	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	黄砂ブロックを含む　ややしまりあり	14	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	ややしまりあり
2	10YR4/4 暗褐色	シルト質砂	ややしまりあり	15	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄砂ブロックを含む　ややしまりあり
3	10YR3/4 暗褐色	砂	黄砂ブロックを含む　しまりなし　抜き	16	10YR4/4 褐色	砂	抜き
4	10YR3/4 暗褐色	シルト質砂		17	10YR6/6 明褐色	砂	柱を抜いた後に一気に埋戻したもの　抜き
5	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	ややしまりあり	18	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	下部に黄砂を縞状に含む
6	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	ややしまりあり	19	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	しまりなし
7	10YR7/8 黄橙色	砂	ややしまりあり	20	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	下部に黄砂を含む　しまりあり
8	10YR3/4 明褐色	砂	しまりなし	21	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	
9	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	ややしまりあり	22	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	
10	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	しまりなし　抜き	23	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	しまりあり
11	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄砂ブロックを全体に含む	24	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	しまりあり
12	10YR6/6 明褐色	砂	しまりなし	25	10YR3/4 暗褐色	砂	ややしまりあり　抜き
13	10YR4/4 褐色	砂	下部に黄砂を含む				

層No.	土色	土性	特徴	層No.	土色	土性	特徴
1	10YR3/4 暗褐色	砂	黄砂ブロック1～5cmを含む	14	10YR3/4 暗褐色	砂	しまりあり
2	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	黄砂を下部に含む	15	10YR5/8 黄褐色	シルト質砂	しまりあり
3	10YR3/4 暗褐色	砂	黄砂ブロックを少量含む　抜き	16	10YR3/4 暗褐色	シルト質砂	ややしまりあり
4	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄砂ブロックを少量含む	17	10YR6/8 黄橙色	砂	しまりなし
5	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	ややしまりあり	18	10YR3/3 暗褐色	シルト質砂	ややしまりあり　抜き
6	10YR3/3 暗褐色	シルト	しまりあり	19	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	しまりあり
7	10YR3/3 暗褐色	砂	ややしまりあり	20	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	黄砂ブロック（大型）を含む　しまりあり
8	10YR6/6 明黄褐色	砂	しまりなし	21	10YR2/2 黒褐色	シルト	しまりあり
9	10YR4/4 にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルトのブロックを含む	22	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	黄砂ブロック（大型）を含む　しまりあり
10	10YR4/4 褐色	砂	しまりなし　抜き	23	10YR3/4 暗褐色	砂	ややしまりあり　抜き
11	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	しまりなし	24	10YR4/4 褐色	砂	しまりあり
12	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄砂ブロック（大型）を含む	25	10YR4/6 褐色	砂	しまりなし
13	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルトのブロックを含む	26	10YR2/3 黒褐色	シルト	しまりあり

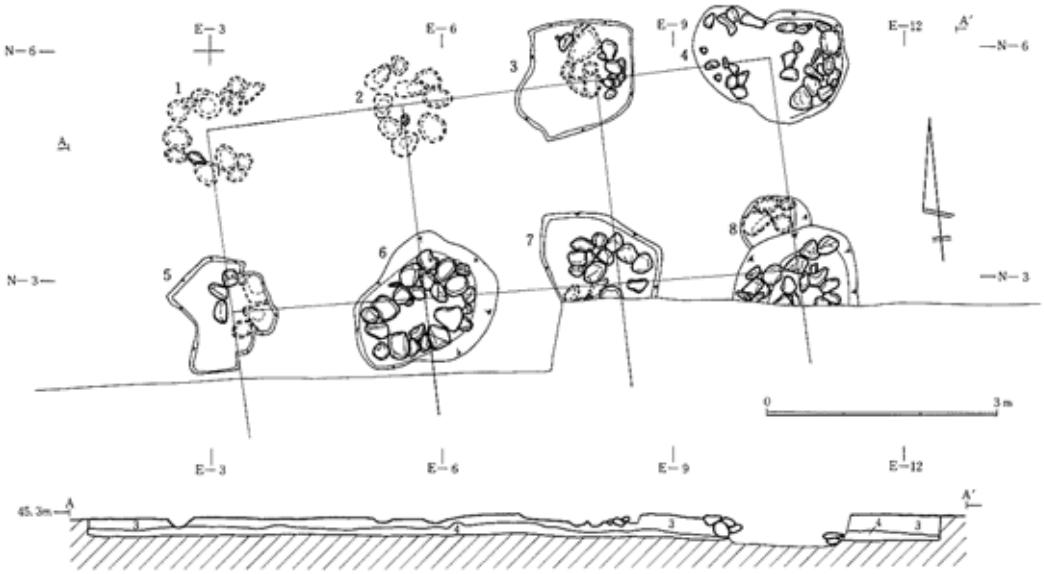
第4図　第1号建物跡



層No.	土色	土性	特徴	層No.	土色	土性	特徴	層No.	土色	土性	特徴
1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	抜き	14	10YR6/8 明黄褐色	シルト質砂		27	10YR6/8 明黄褐色	シルト質砂	
2	10YR5/8 明黄褐色	シルト質砂		15	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		28	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		16	10YR5/8 明黄褐色	砂質シルト	褐色ブロックを含む	29	10YR4/4 褐色	砂質シルト	抜き
4	10YR5/8 明黄褐色	シルト質砂		17	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	粘性あり	30	10YR5/8 黄褐色	シルト質砂	
5	10YR5/8 黄褐色	シルト質砂		18	10YR4/4 褐色	シルト	抜き	31	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
6	10YR4/4 褐色	シルト		19	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		32	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂	
7	10YR4/4 褐色	砂質シルト		20	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂		33	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
8	10YR6/8 明黄褐色	砂質シルト		21	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		34	10YR7/6 明黄褐色	砂	
9	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト		22	10YR5/8 明黄褐色	シルト質砂	褐色土ブロックを含む	35	10YR3/3 暗褐色	シルト	
10	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂		23	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト		36	10YR7/6 明黄褐色	シルト質砂	
11	10YR3/3 暗褐色	シルト		24	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		37	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	抜き
12	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂		25	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂					
13	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト		26	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト					

層No.	土色	土性	特徴	層No.	土色	土性	特徴	層No.	土色	土性	特徴
1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	抜き	9	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色砂ブロックを含む	17	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	粘性あり
2	10YR6/8 明黄褐色	シルト質砂		10	10YR5/6 明黄褐色	シルト質砂		18	10YR5/6 明黄褐色	シルト質砂	
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	粘性あり	11	10YR4/4 褐色	シルト		19	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
4	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂		12	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質砂		20	10YR5/6 明黄褐色	シルト質砂	
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		13	10YR4/4 褐色	砂質シルト	抜き	21	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘性あり
6	10YR5/6 明黄褐色	シルト質砂		14	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト		22	10YR5/6 明黄褐色	シルト質砂	
7	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト		15	10YR5/6 明黄褐色	シルト質砂		23	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
8	10YR4/4 褐色	シルト	抜き	16	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄褐色砂ブロックを含む				

第5図　第2号建物跡



層No.	土色	土性	特徴
1	10YR5/1 灰色	シルト	水田耕作土（現代）
2	7.5Y6/6 灰色	粘土質シルト	上面に酸化鉄付着（水性堆積物）
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	旧表土 遺構構築面
4	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	水性堆積物

第6図　第3号建物跡

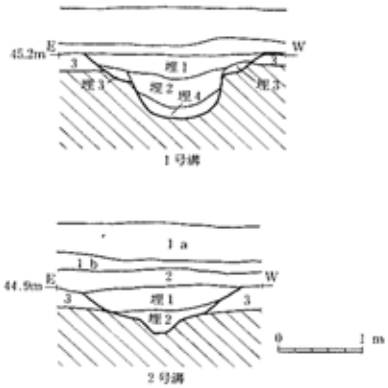
は約 1.7m×約 1.5mの方形の柱穴が南北に二個ずつ連結した布掘り状を呈する。柱穴の深さは確認面から 60 ㎝～130 ㎝である。遺物は出土していない。

この建物を取り囲むように 4 条の溝が検出された。これらの溝と建物の距離は、平均で 70 ㎝～80 ㎝の間隔でおおむね建物と平行している。これらの溝はこの建物の雨落ち溝と考えられる。また、この中で第 6 号溝、第 7 号溝はそれぞれ重複している。これらの溝はそれぞれ、ほぼ同じ場所で、同じ程度で掘られており、作り替えと考えられる。それぞれの溝の規模は総長 1.70m～6.70mで断面形はU字形であり、深さは 10 ㎝～15 ㎝である。出土遺物は第 5 号溝・第 8 号溝から土師器・須恵器・平瓦の細片がある。

b.礎石建物跡

第 3 号建物跡（第 6 図）

調査区南西部の 3 層黒褐色シルト層上面で検出された。東西 3 間、南北 1 間以上の建物跡であり、建物の南側部分は調査区外へ延びていくものと考えられる。礎石そのものは確認できなかったが、根固め石が確認されたこと、この建物跡の西側で礎石とみられる大石が確認されたことから、この建物は礎石建ちの建物であったと考えられる。P5・P6・P7 の中にある根固め石はほぼ原位置を保っているものと考えられるが、他のものについては、後世の耕作などによる攪乱により、抜き取られているものもある。柱間寸法は根固め石の中心や、それらの抜き取り痕跡の位置をもとにすると、北側の柱列で東から 2.40m・2.48m・2.56mで総長 7.36m、南北が西で 2.48mである。建物の方向は約 1°西に偏する。出土遺物には周辺から出土の土師器・須恵器の細片がある。



層No.	土色	土性	特徴
埋1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	植物根によって乱されている
埋2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	場所によって炭化物集中
埋3	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色ブロックを含む　自然堆積層
埋4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色砂ブロックを含む

層No.	土色	土性	特徴
1a			盛り土
1b	10YR5/1 灰色	シルト	水田耕作土（現代）
2	7.5YR5/1 灰色	粘土質シルト	上面に酸化鉄付着（水性堆積物）3層との境は漸移的
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	旧表土　連続構築面
4	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	水性堆積物
埋1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	3層起源　木炭粒（5mm）を少量含む
埋2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	下半部に4層の小ブロックを含む

第7図　第1・2号溝断面図

②溝跡

第1号溝（第3図・第7図）

調査区西側の3層黒褐色シルト層上面で検出された。第1号建物跡の西側約3.5mに位置する。規模は上端約160㎝・下端60㎝～100㎝・深さ約80㎝ある。断面形は逆台形を呈し、確認面より約30㎝のところで段がつく。溝の方向は真北より東へ約4°偏する。また、平成3年の白石市教育委員会の確認調査により、この溝はさらに約20m北側に延び、西側へ曲がることが確認されている（註－1）。堆積土は暗褐色と黄褐色の自然流入土である。出土遺物には須恵器の甕・高台付杯の破片・土師器・杯（第8図－5）・軒平瓦・平瓦・丸瓦がある。

第2号溝（第3図・第7図）

調査区東側の3層黒褐色シルト層上面で検出された。第2号建物跡の東側約11.5mに位置する。規模は上端60㎝～130㎝・下端10㎝～40㎝・深さ約60㎝である。断面形は皿状を呈し、段がついてさらに深くなる部分もある。溝の方向は真北より約1°西に偏する。堆積土は灰白色・黄褐色のシルトである。出土遺物は平瓦がある。

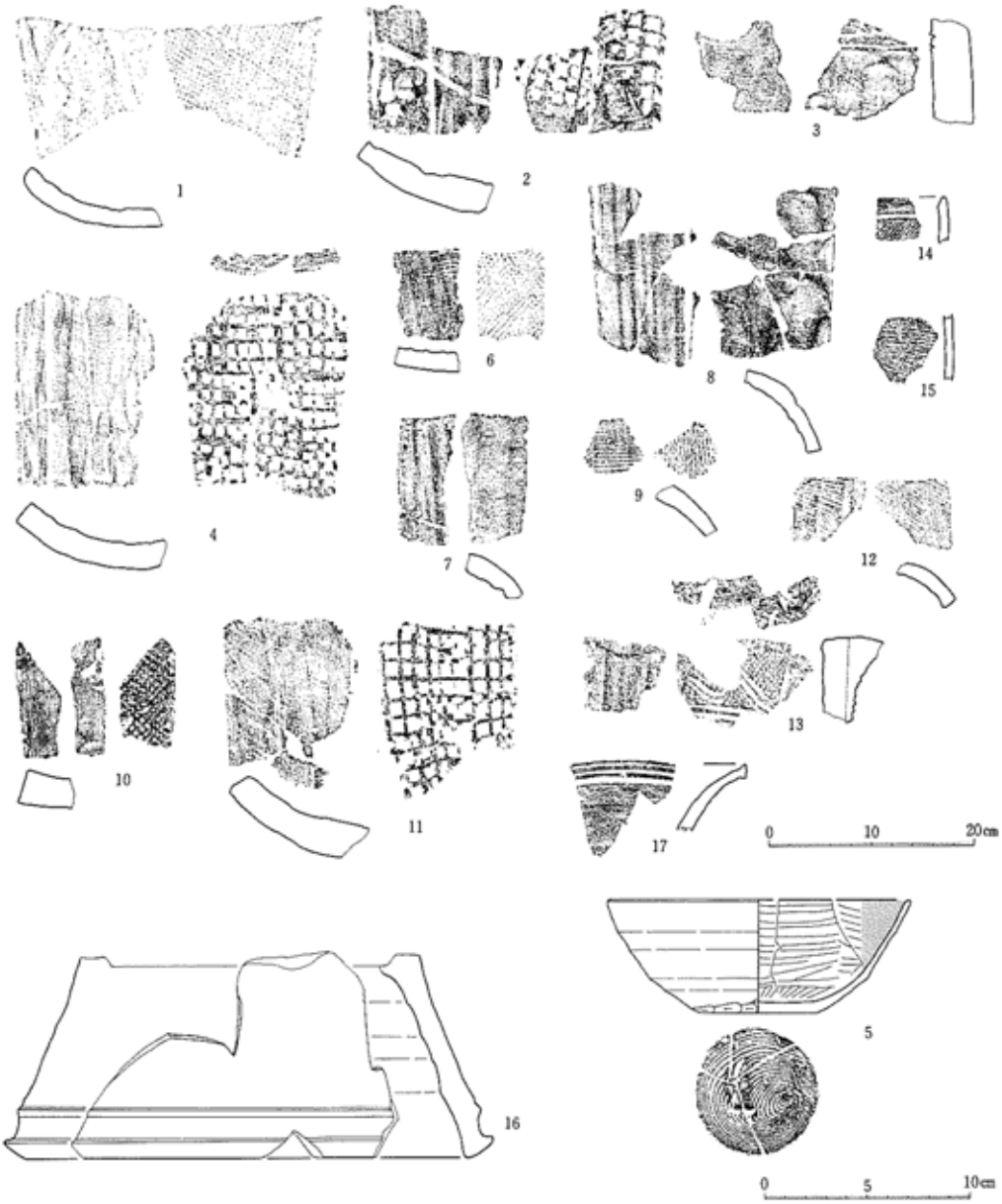
第3号・4号溝（第3図）

調査区北西の3層黒褐色シルト層上面で検出された。第1号建物跡の約70㎝西側・約6m50㎝北側に位置する。第1号建物跡の西・北・東をコ字状にめぐるが、第1号建物跡のP-3を切る土壙を切っており、これらよりも新しい。規模は総長約28m・上端80㎝～2.40㎝・深さ10㎝～30㎝である。第4号溝は第1号建物跡の東側約1.3mに位置する。規模は総長約3.3m・上幅20㎝～70㎝・深さ約10㎝である。平成2年の確認調査によると第4号溝は、さらに北側に延びていくことが確認されており（近藤:1991）、第3号溝の東側部分の南端とつながっていたものと考えられ、さらに南側へ延びるものと考えられる。出土遺物は第3号溝から丸瓦・平瓦がある。

③土壙（第3図）

調査区東側、3層黒褐色シルト層上面で検出された。1.4m×2.2mの隅の丸い三角形を呈する。深さは約30㎝である。埋土は1層認められた。遺物は出土していない。

④その他の出土遺物



No	器種・器形	遺構	層位	口径	底径	器高	調整	登録No.	図版No.
1	平瓦	1号溝	埋土				凸面：格子叩き目→ケズリ(一部)　凹面：布目→ナデ(一部ケズリ)横骨痕　指圧痕	1号溝－1	3－1
2	平瓦	1号溝	埋土				凸面：格子叩き目→ケズリ(一部)　凹面：布目→ナデ(一部ケズリ)横骨痕　指圧痕	1号溝－2	
3	軒平瓦	1号溝	埋土				凸面：ケズリ　凹面：丁寧なケズリ	1号溝－3	3－4
4	軒平瓦	1号溝	埋土				凸面：格子叩き目　凹面：布目→ケズリ　横骨痕　側面：ケズリ　瓦当面：重弧紋	1号溝－4	3－2
5	土師器・杯	1号溝	埋土	14.8	6.8	5.2	外面：ロクロ　下部ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ＋黒色処理　底部：回転糸切り	1号溝－5	
6	平瓦	2号溝	埋土				凸面：格子叩き目　凹面：糸切り→布目　横骨痕あり	2号溝－1	3－8
7	丸瓦	3号溝	埋土				凸面：ケズリ　凹面：布目　横骨痕あり	3号溝－1	3－6
8	丸瓦	3号溝	埋土				凸面：ケズリ　凹面：布目　横骨痕あり	3号溝－2	
9	丸瓦	3号溝	埋土				凸面：平行叩き　凹面：糸切り→布目　小口面：ヘラケズリ　上部面取り	3号溝－3	3－7
10	平瓦	3号溝	埋土				凸面：格子叩き目　凹面：丁寧なヘラケズリ　横骨痕　側面・小口面：ヘラケズリ	3号溝－4	
11	平瓦	表土	1層				凸面：格子叩き目　凹面：布目→ヘラケズリ　横骨痕あり	表土－1	3－9
12	丸瓦	表土	1層				凸面：平行叩き→ヘラケズリ(一部)　凹面：糸切り→布目　横骨痕あり　側面：上部面取り　小口面：ケズリ	表土－2	3－5
13	軒平瓦	表土	1層				凸面・凹面：布目→ケズリ(一部)　瓦当面：無紋(磨滅状)　顎部：バチ状・格子叩き目→沈線(三本以上)→縦波状(三本)	表土－3	3－3
14	縄文土器	表土	1層				外面：横位沈線・縄文LR	表土－4	
15	縄文土器	表土	1層				外面：縄文LR	表土－5	
16	円筒埴輪	表土	1層	24			外面：ロクロ　内面：ロクロ　台形型式	表土－6	3－11
17	須恵器・壺	表土	3層	38.8			外面：ロクロナデ　4条の横線　波紋状2単位　内面：ロクロナデ	3層－2	3－10

第8図　出土遺物

表土などから軒平瓦 3 点、平瓦約 40 点、丸瓦約 10 点、縄文土器 3 点、須恵器約 20 点、土師器約 20 点、円面硯 1 点が出土しているが、ほとんどが破片であり実測可能なものは 17 点にとどまった。ここではそれらについて記す。

縄文土器・第 8 図－14 は、口縁部の破片で、単節の縄文（ＬＲ）が施されており、口縁部に平行に沈線が施されている。第 8 図－15 は、体部のみの破片で単節の縄文（ＬＲ）が施されている。縄文時代中期のものと考えられる。

円面硯は脚部のみの破片で、脚部の直径 24 ㎝で台形の窓が付く（第 8 図－16）。

須恵器・甕は口縁部の破片で、外面には 4 本単位の櫛歯文が 2 条施されている（第 8 図－17）。

土師器・杯は内面、外面ともロクロ調整で、内面には黒色処理が施される。平安時代のものと考えられる（第 8 図－5）。

第Ⅳ章　考　　察

①出土遺物について

今回出土した遺物の中では瓦類が多数を占める。ここでは瓦の年代について考えたい。なお、白石市の確認調査でも今回調査した第 1 号溝跡の北側部分で瓦類が多数出土しており、ここではそれについても合わせて考察することとする。

出土した瓦には軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。軒平瓦、平瓦についてみると次の特徴が共通して認められる。凹面には模骨痕が認められ、側面は凸面、凹面に直交する。この様な特徴を示すものは、桶巻き作りによるものと考えられる（進藤:1976）。また、すべての平瓦は凸面に格子叩き目が認められ、格子目の大きさから下記の三つに分類される。

Ａ：格子叩き目の大形のもの

格子目の大きさは 0.8 ㎝～1.0 ㎝で深さ 0.3 ㎝～0.7 ㎝を計り、5 ㎝四方あたり 15 個を数える。凹面は布目痕が認められ、ケズリを加えているものがある。また、瓦の厚さは 2.6 ㎝～3.2 ㎝である。焼成は軟調で色調は橙色～褐色である（第 8 図－2・4・11、第 10 図－7・8・10）。

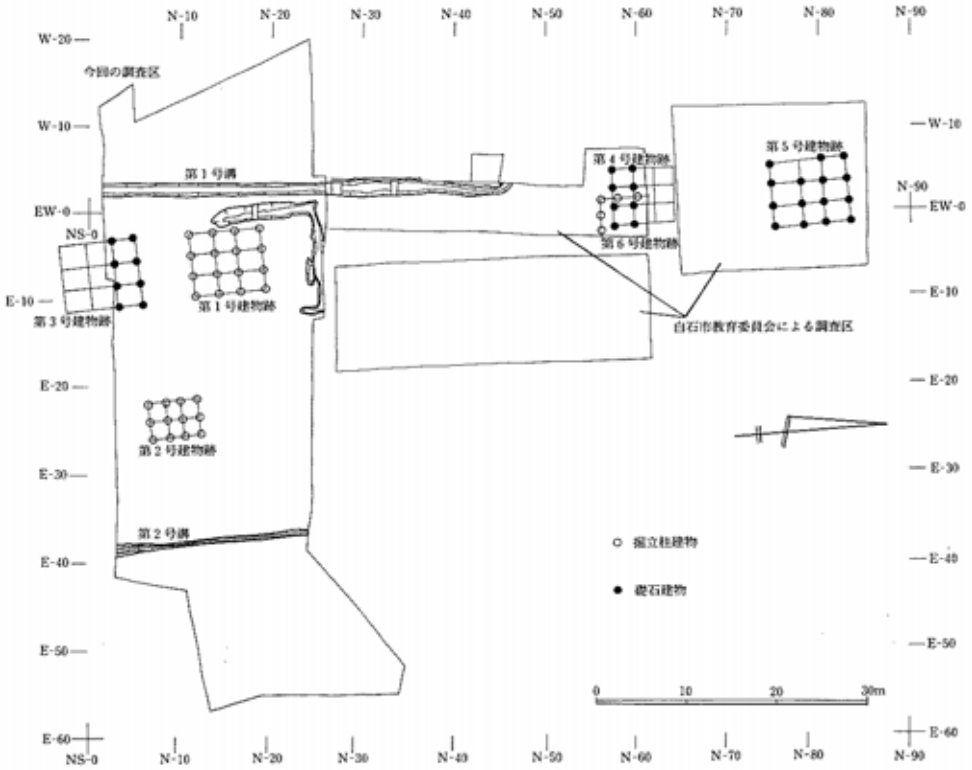
Ｂ：格子叩き目が中形のもの

格子目の大きさは 0.4 ㎝～0.6 ㎝で深さ 0.1 ㎝を計り、5 ㎝四方あたり 40 個を数える。凹面は全面にケズリが加えられている。また、瓦の厚さは 3.5 ㎝～4.5 ㎝である。焼成は軟調で色調は黄燈である（第 8 図－3・10、第 10 図－1）。

Ｃ：格子叩き目が小形のもの

格子目の大きさが 0.2 ㎝～0.4 ㎝で深さ 0.1 ㎝を計り、5 ㎝四方あたり 70～80 個を数える。凹面は布目が確認でき、ケズリを加えているものがある。また、瓦の厚さは 1.5 ㎝～2.0 ㎝である。焼成は堅緻で色調は黄橙～黒褐色である（第 8 図－1・6、第 10 図－2・5）。

軒平瓦は大きく二つに分かれる。(1) 類は瓦当面に 4 条のロクロ引きの重弧文が施され、さらに、瓦当面から約 20 ㎜の凸面部分の位置に、瓦当面と平行に沈線が 1 条施されている。瓦当面から 122 ㎜で約 2 ㎜の段をつけ顎部としている。また、顎部と平瓦部の境には、区画のための二条の沈線が施されて

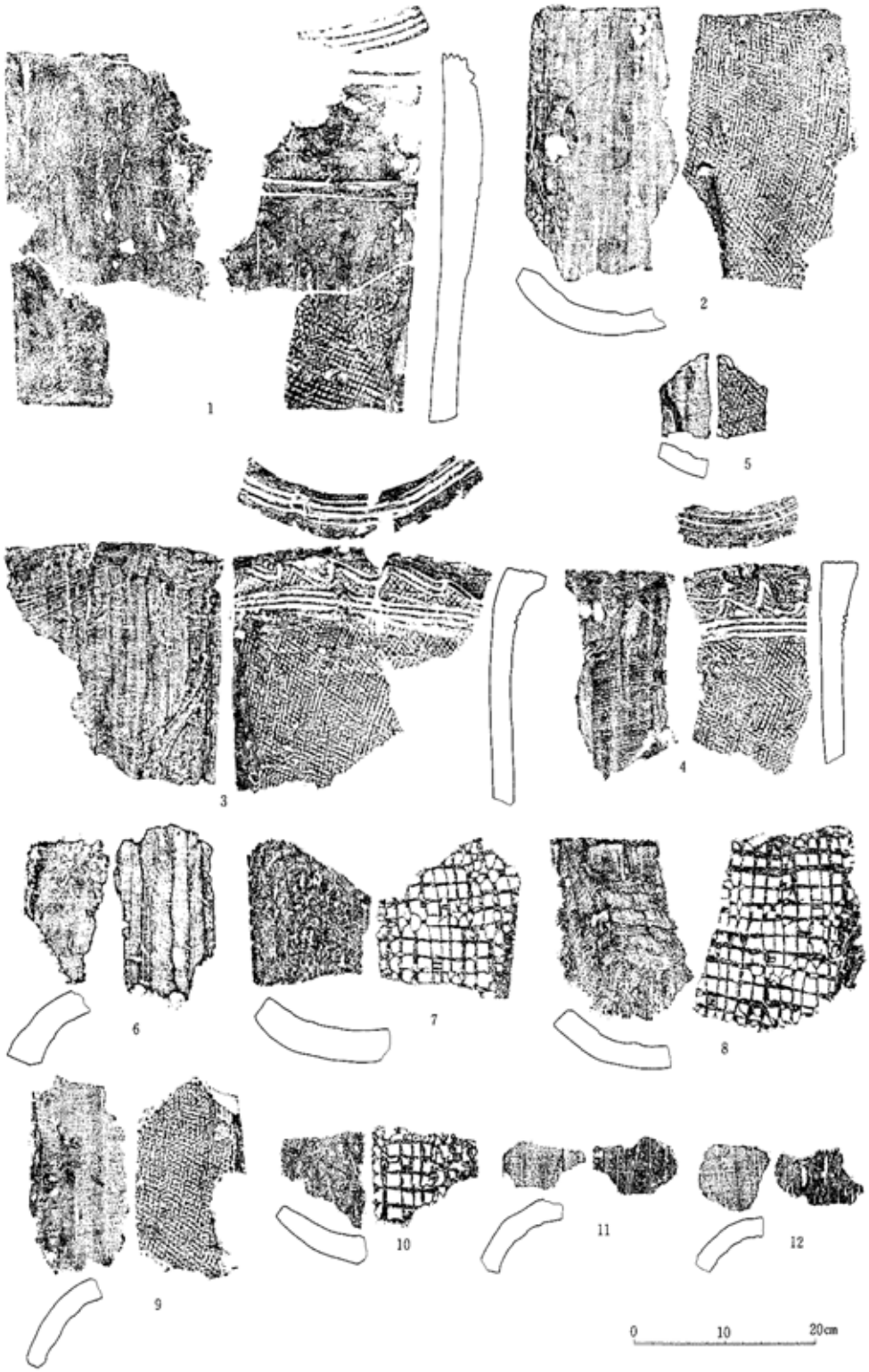


第９図　建物配置模式図

いる（第８図－3、第10図－1）。この軒平瓦は格子目の大きさが0.4㎝～0.6㎝で、平瓦Ｂ類に対応する。平瓦Ｂ類および軒平瓦（1）類に類似する瓦としては、白石市兀山窯跡出土の瓦がある。この瓦は凸面に0.4㎝～0.6㎝の格子叩き目が、瓦当面には４条のロクロ引き重弧文が施されている。また、瓦当面から126㎜の位置に約２㎜の段をつけ、顎部としている。以上の特徴が類似していることから、（1）形式の瓦は兀山窯跡から供給されたものと考えられる。なお、兀山窯跡出土の瓦は軒丸瓦等の観察により、７世紀末葉～８世紀初頭頃の年代が考えられている（菊地・佐々木:1985）。一方、（2）類は顎部がバチ状に広がり、瓦当面には３ないし４条の手書きの重弧文が施される。また、顎部の凸面部分に３条の鋸歯状の沈線が施される（第８図－13、第10図－3・4）。この軒平瓦は格子目の大きさが0.2㎝～0.4㎝の大きさで、平瓦Ｃ類に対応する。平瓦Ｃ類および軒平瓦（2）類に類似する瓦としては、多賀城跡出土の第Ｉ期の瓦群（511,514 タイプ）が挙げられる。多賀城第Ｉ期の軒平瓦は瓦当面に手書きの重弧文が施され、顎部はバチ状に広がり凸面に鋸歯状の沈線が施されるという特徴を持つ（多賀城跡調査研究所:1980・1982）。これらの特徴が類似していることから、（2）形式の軒平瓦は多賀城第Ｉ期に位置づけられる。以上のことから、軒平瓦はおおむね８世紀前半のものと考えられる。

②遺構の性格と年代について（第９図）

今回の調査では合計３棟の建物跡が検出された。また、これまでの調査で礎石建物跡２棟、掘立柱建物跡１棟が検出されており、合計６棟の建物跡が検出されている。



第10図　1号溝出土遺物（参考資料）

これらの中で掘立柱建物跡についてみると、第1号建物跡の南妻と第2号建物跡の北妻は柱筋を揃えている。また、第6号建物跡の南側柱列と第1号建物跡の北妻は約39m（130尺）離れており、これらの建物跡はほぼ西側柱列の柱筋を揃えている。このことからこれら3棟の建物は計画的に配置されたものと考えられる。

一方、礎石建物跡についてみると、第3号建物跡と第5号建物跡は約72m（240尺）離れて東西の柱筋を揃えている。また、第4号建物跡は第5号建物跡の南約10.5mに位置に、ほぼ東西の柱筋を揃えて並んでいる。このことからこれら3棟の建物も計画的に配置されたものと考えられる。

また、第1号溝跡は3層上面で確認されており、建物跡とほぼ平行するが、今回の調査区の北側で西側に曲がるという報告があることから（註1)、今回検出された建物群以外のものを区画する施設と考えられる。

前述した白石市の調査で、第6号掘立柱建物跡と第4号礎石建物跡が重複し、礎石建物跡の方が新しいことが確認されており、建物跡に二時期あることが報告されている。このことから、掘立柱建物から礎石建物への変遷が考えられている（註1)。

遺構の年代について見ると、第1号溝跡と第1号建物跡から瓦が出土しており、瓦の年代が8世紀前半と考えられることから、第1号溝跡、第1号建物跡は8世紀前半のものと考えられる。第2号建物跡・第6号建物跡についても計画的に配置されていることから8世紀前半のものと考えられる。礎石建物跡については重複関係から、掘立柱建物より新しいことが確認されているので、これらよりも新しいものと考えられる。

今回検出された建物跡はすべて総柱の建物であり、構造から倉庫跡と考えられる。また、これらの倉庫跡は計画的に配置されている。このように計画的に配置された倉庫群がみられる遺跡としては、東山遺跡、亘理三十三間堂遺跡などがあり、郡衙の倉庫院跡と考えられる。本遺跡の周辺は古代においては苅田郡に属すと考えられている。続日本紀によると養老5年（721年）に柴田郡から分かれて苅田郡が建置されるという記載がみられる。また、遺構の年代がおおむね8世紀前半と考えられ、この記載と時期的な矛盾がないことから、大畑遺跡は苅田郡衙と考えられ、今回検出された遺構は苅田郡衙の倉庫院と考えられる。なお、表土・遺構周辺から平安時代の土師器・須恵器が出土しており、平安時代まで下る可能性もある。

第Ⅴ章　ま と め

1. 今回の調査では掘立総柱建物跡2棟、礎石総柱建物跡1棟、溝跡8条、土壙1基が検出された。建物跡は計画的に配置された郡衙の倉庫院跡の可能性がある。掘立柱建物から礎石建物への変遷がうかがわれる。
2. 出土瓦から遺構の年代はおおむね8世紀前半代～平安時代までと考えられる。
3. 今回検出された遺構が郡衙の倉庫院跡であること、時期的に苅田郡建置と矛盾しないことから、本遺跡は苅田郡衙の可能性がある。

註 1. 白石市教育委員会の平成 3 年の確認調査によるもので、同教育委員会・清野俊太朗氏の御教示による。

引用・参考文献

阿部　義平（1989）「官衙」『考古学ライブラリー50』ニューサイエンス社

阿部　義平（1992）「国府と郡衙」『古代の役所』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

岩見・菅原・村田・後藤（1994）『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第 163 集

角田市教育委員会（1980）『角田郡山遺跡』角田市文化財調査報告書第 3 集

角田市教育委員会（1993）『角田郡山遺跡Ⅰ』角田市文化財調査報告書第 10 集

菊地・佐々木（1985）「白石市兀山遺跡の古瓦」『赤い本～片倉信光氏追悼論文集』赤い本同人会

近藤　和夫（1991）「大畑遺跡」『舘南囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 144 集

佐藤　則之（1988）「三十三間堂遺跡」宮城県文化財調査報告書第 127 集

篠原　信彦（1993）『大蓮寺窯跡ー第 2・3 次発掘調査報告』仙台市文化財調査報告書 168 集

進藤　秋輝（1976）「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』

清野俊太朗（1991）「大畑遺跡発掘調査概要」『第 18 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

辻　秀人（1988）『陸奥の古瓦』福島県立博物館

辻　秀人（1992）「陸奥の古瓦の系譜」『福島県立博物館紀要第 6 号』福島県立博物館

真山　悟（1993）「下伊場野窯跡群調査の概要」『平成 5 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』

宮城県多賀城跡調査研究所（1980）『多賀城跡　政庁跡　図録編』宮城県多賀城跡調査研究所

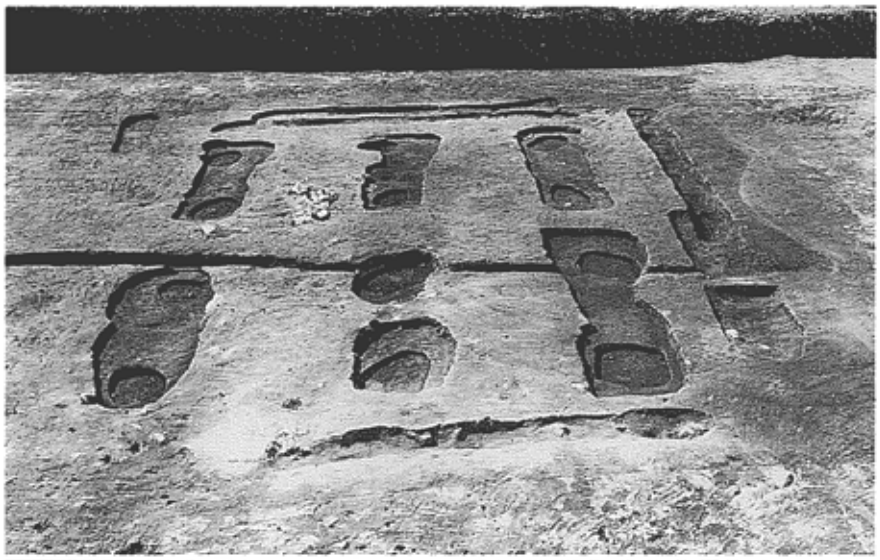
宮城県多賀城跡調査研究所（1982）『多賀城跡　政庁跡　本文編』宮城県多賀城跡調査研究所

宮城県多賀城跡調査研究所（1987）『東山遺跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 12 集

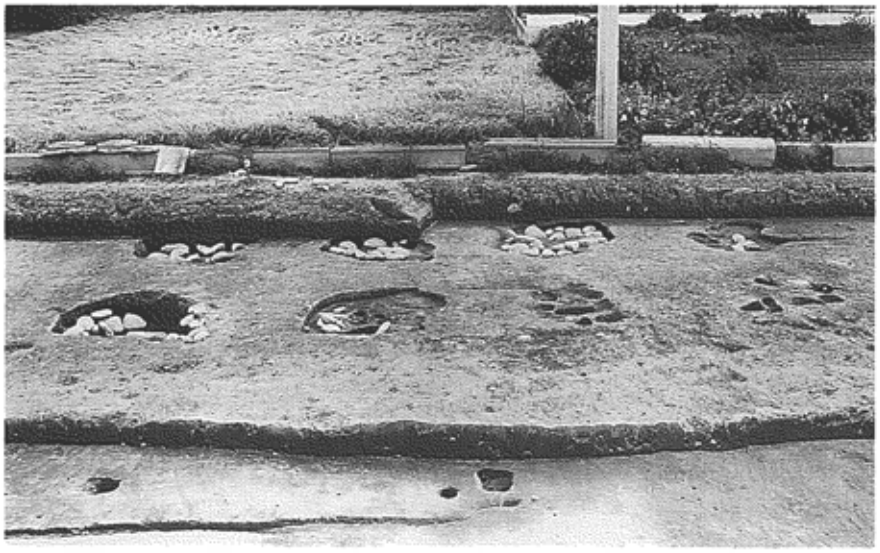
宮城県多賀城跡調査研究所（1989）『東山遺跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 13 集

写　真　図　版

①第１号建物跡
（東から）

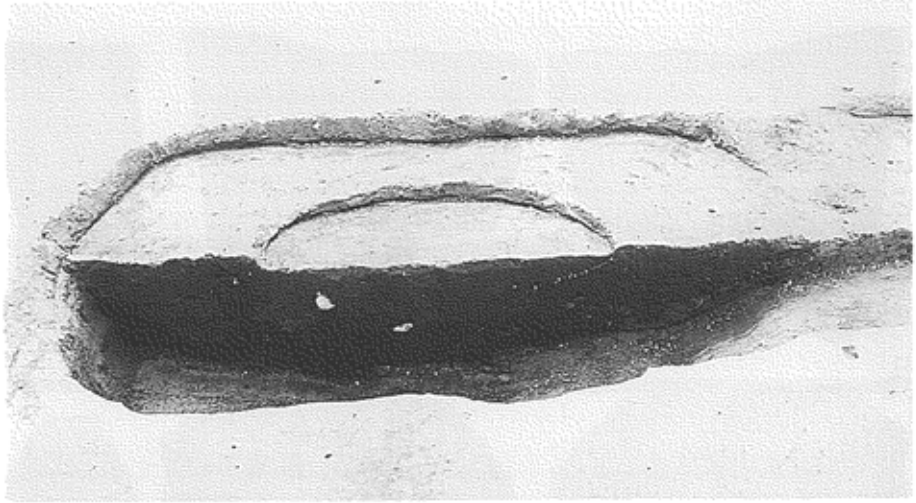


②第２号建物跡
（北から）



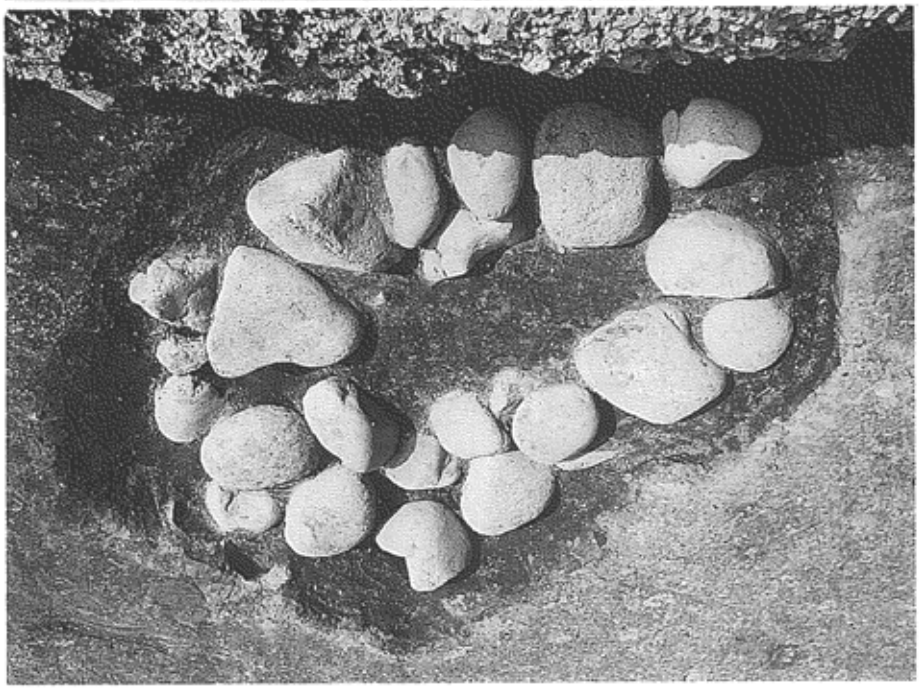
③第３号建物跡
（北から）

図版－１



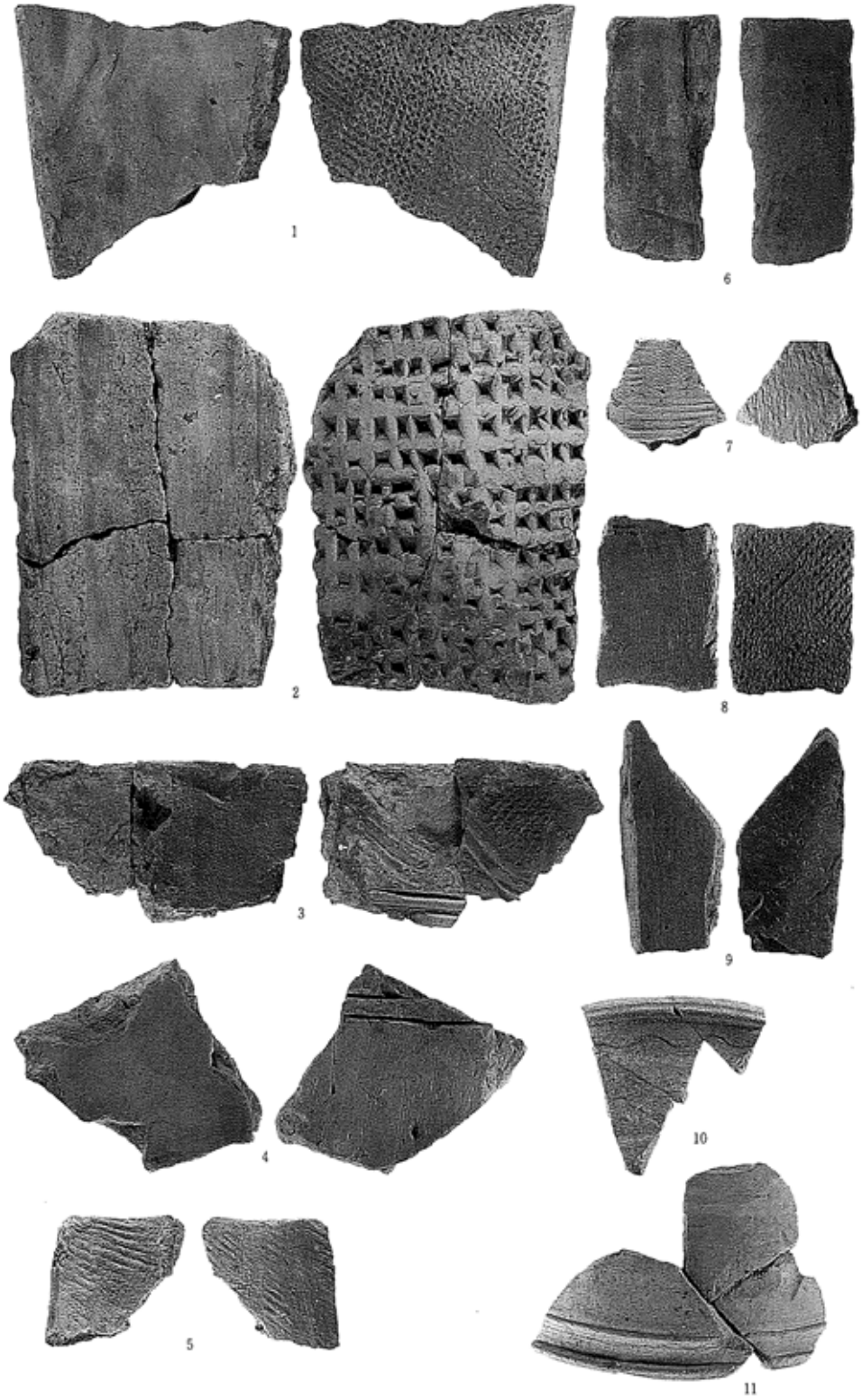
④第１号建物跡
Ｐ－８断面
（北から）

⑤第２号建物跡
Ｐ－３断面図
（東から）



⑥第３号建物跡
据え穴－６
（北から）

図版－２



図版－3　出土遺物

まち がしら い せき
町頭遺跡

わか みや い せき
若宮遺跡

目　　次

町頭遺跡……23
1、はじめに……23
2、調査の成果……25
3、石碑・塚の年代と性格……26
4、碑文と伝承……27
5、まとめ……28
6、注・引用参考文献……28

若宮遺跡……29
1、はじめに……29
2、発見された遺物……29
3、遺物の年代……33
4、引用参考文献……34

調 査 要 項

遺 跡 名　町頭遺跡（まちがしらいせき）・遺跡番号（60012）
所 在 地　本吉町馬籠字町頭・上野
調査面積　30 ㎡
調査期間　平成 5 年 5 月 31 日～6 月 4 日
調査主体　宮城県教育委員会
調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員　斉藤吉弘・阿部恵
調査協力　本吉町教育委員会・高橋孝（文化財保護委員）
昭和 55 年の遺跡状況の写真（国道 346 号線改修前の旧薬師堂裏写真・3 号塚石碑拓本）は高橋孝氏の撮影による

遺 跡 名　若宮遺跡（わかみやいせき）・遺跡番号（60012）
所 在 地　志津川町戸倉字若宮
調査面積　250 ㎡
調査期間　平成 5 年 6 月 3 日
調査主体　宮城県教育委員会
調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員　斉藤吉弘・阿部恵
調査協力　志津川町教育委員会

町 頭 遺 跡

1、はじめに

(位置)遺跡は本吉町馬籠字町頭 35-3 に所在する。ＪＲ気仙沼線本吉駅から南西 5.7 ㎞、国道 346 号と県道鱒淵線が交差した西側に位置する。

本吉町南部には北上山地南部東麗の丘陵と海岸段丘を開析して馬籠川・津谷川とその支流が流れており、その流域には段丘（河岸段丘）と谷地形が見られる。

遺跡は上野地区～町頭地区にある狭い谷地形東端の、馬籠川支流左岸に位置している。この谷地形は標高 89～85mの南東方向の緩斜面である。

現状は国道（346 号線）工事などで削平を受け、旧地形が残っている薬師堂裏（南北 15×東西 40 mの範囲）に塚・石碑（薬師如来・十二神将など）が確認されている。

（周辺の遺跡）町内では縄文時代～近世まで遺跡が 51 ヶ所確認されているが、町の南西部では中世以降の遺跡が多い。中世以降の遺跡には館跡・塚・石碑がある。

館跡には町頭遺跡の南東に遠野館・信夫館・陣平館があり、馬籠川と旧街道に面した丘陵尾根上に立地している（第１図)。信夫館は『信夫郡佐藤庄司勝信公之御台』が館主と伝えられている。

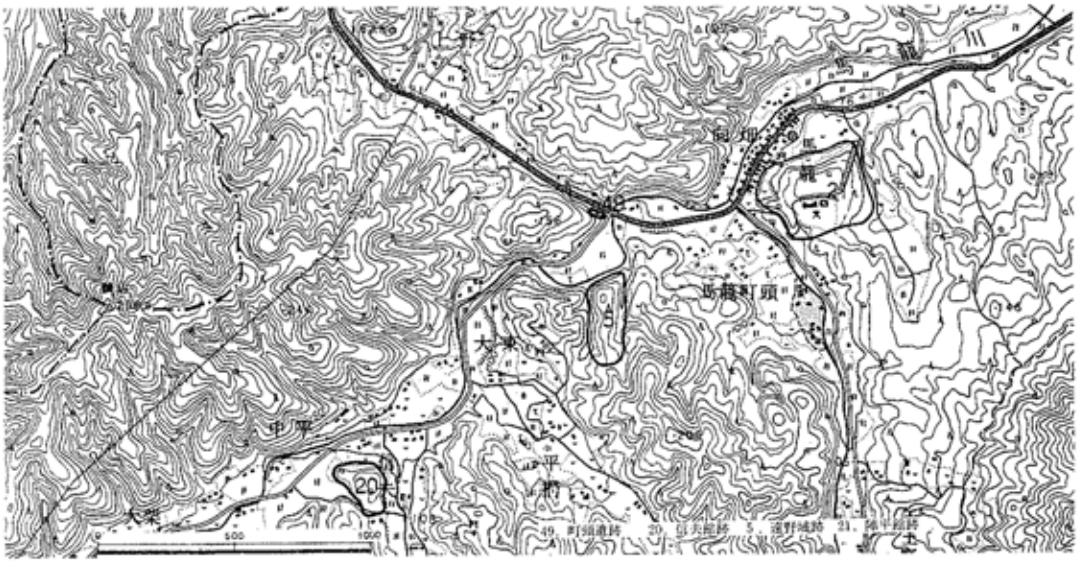
塚跡は本遺跡の他に津谷川に面した丘陵尾根に中川内塚跡、宇南田塚群がある。

石碑は浄勝寺旧墓地内に中世の板碑（文明期)、天正・文禄・慶長期の供養碑・逆修碑がある。

（塚の伝承）

本遺跡のある地域は『馬籠村風土記御用書出・安永 9 年』（1780）で旧街道（旧狼河原町江之道と旧鱒淵村江之道）の分岐点にあった薬師堂の境内にあたる。『同書出』には東向きの薬師堂（3 間 4 面）の記載が見られるが、境内の塚・石碑のことはふれていない。

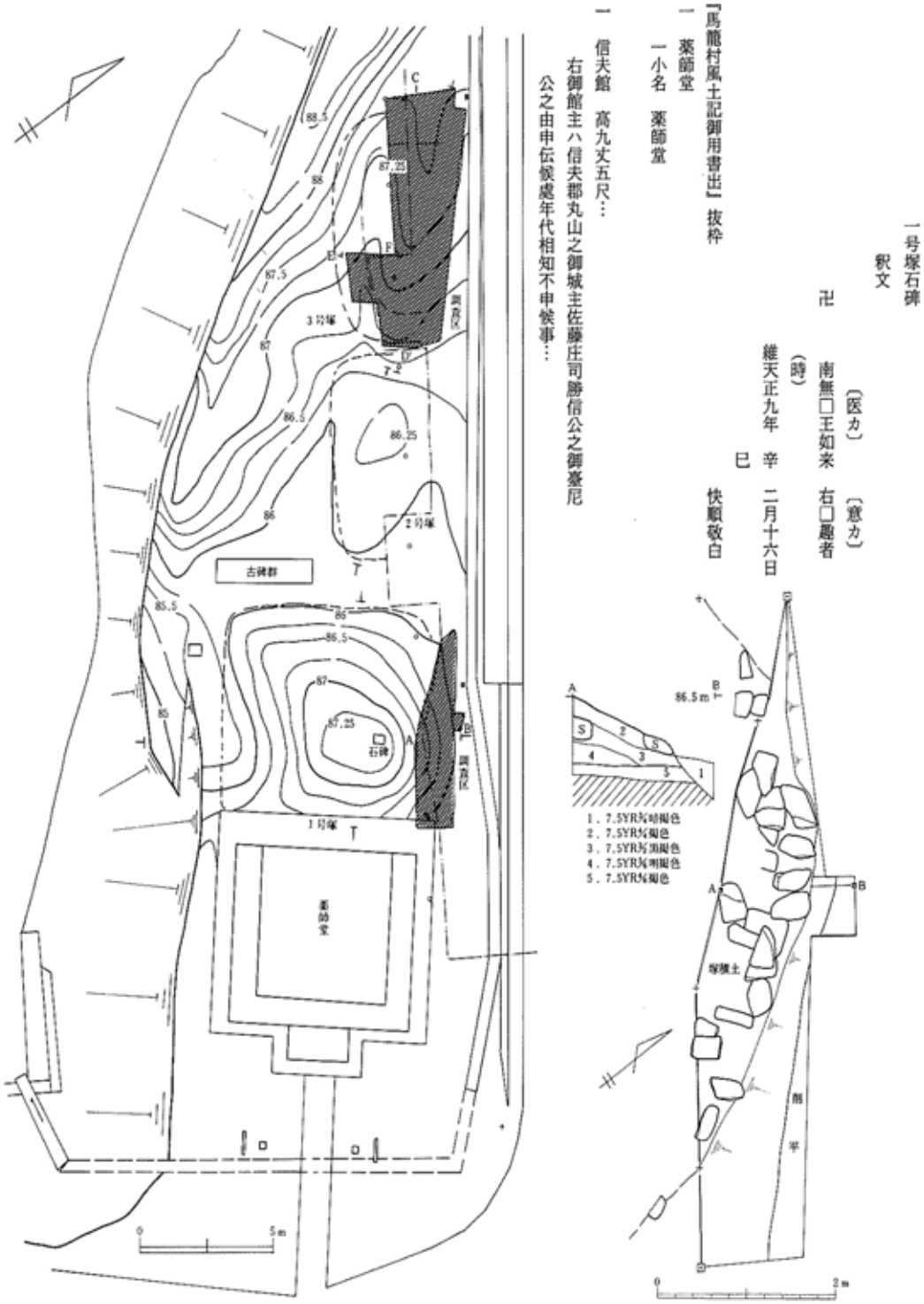
古碑・塚の確認は「歴史の道調査」や 1980 年の国道改修であるが、塚の説明は見られない。この後、『本吉町誌』（1982）では１号塚の石碑を釈文し、塚について「塚には尼公塚の伝承が残っており、供



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

養塚の可能性がある」としている。

尼公とは『馬籠村風土記御用書出・古館（安永９年）』・『本吉郡北方津谷村浄勝寺書出・故事来歴之事（安永９年）』などに「飯坂信夫郡佐藤庄司勝信の御臺」との伝承がある。



2、調査の成果

遺構は薬師堂裏に塚3基と江戸時代の古碑がある。

塚は斜面から平坦な部分に変わる標高 87～86mにあり、南東方向に 2～3m間隔で 3 基並んでいる（東から西へ 1～3 号)。1～3 号塚は 1980 年の国道改修工事で東側が削平されている。

(調査区)

調査の対象は国道 346 号線の歩道橋工事（ブロック擁壁工事と支柱基礎工事）にかかる約 80 ㎡である。

確認のため表土を除去した結果、調査は 1・3 号塚に架かる支柱基礎 2 カ所（P1・P2）を対象にして行なった。調査面積は支柱基礎 P1 部分が 9 ㎡、支柱基礎 P2 部分が 27 ㎡である（第 2 図)。

(塚跡と石碑)

A）1 号塚跡

平面形：南辺～東辺の裾が削平され元の規模は不明である。頂部の平坦部分が南北方向の長方形であること・残存する南西隅がほぼ直角であることから以前は南北方向の長方形であったと思われる。西辺は約 50°西に振れている。塚頂部の北側に石碑が立っている。

規模：下端の現存長は南北 8m・東西 7m、高さは 1.54mである。頂部は平坦で東西 2m×南北 2.5mである。

積み土：東・北辺の裾部は削平されている。旧表土の上に褐色土、黒褐色土が直接積んであり、積み土中に角礫・円礫が入っている。積み土の高さは約 1.3mである。なお、長方形の角礫が西辺と南辺の裾に 2～3 段積んであり、裾廻りの抑えにしてあったことから東・北辺も同様の構造であったと思われる。遺物はない。

石碑：碑面は東向きの柱状をした自然石で、頭部は平である。地上部の高さは 171 ㎝、幅 41 ㎝、厚さ 22 ㎝である。銘文は磨滅して見にくい状況にあるため、釈文は『本吉町誌Ⅱ－金石史』にしたがった。

B）3 号塚

位置は 2 号塚から北西に約 2m離れている。塚の上に二つに折れた石碑が碑面を表にして西側に倒れている。地山面で土壙が検出された。

平面形：南半の塚基底部（削り出し部分）と周溝が残っている。残存する周溝と基底部から方形を基調としている。基底部西辺は約 45°西に振れている。

規模：基底部上面は東西約 5.2m、南北残存長 2mである。周溝内側下端は東西 5.8m、周溝外側上端は東西 7.5mである。

基底部：積み土は確認できなかった。南側の地山面で土壙が検出されている。

周溝：底面は平坦で、南側の立ち上がりは緩やかである。北側は不明である。南辺の幅は 1m、深さは基底部から 1.3～1.7mである。堆積土は褐色・暗褐色・黒褐色のシルトである。

土壙：平面形は円形で、断面は船底状をしている。大きさは東西 85 ㎝・南北 80 ㎝で、深さは 40 ㎝である。埋め土は暗褐色である。石碑の周囲に裏込めの礫があるため石碑の据え方と思われる。

石碑：埋設部が土壙に斜めに入った状態で碑面を表にして北西側に倒れている。自然石を利用し、頭部が山形に整形されている。

名号と銘文の間が斜めに破損しており、全体の長さは不明である。残存長は山形の部分が約 30 ㎝、碑文の部分が 1.3mで、幅 0.9m、厚さ 25 ㎝である。このうち銘文下の埋設部分は 50 ㎝である。

碑面は破損しており、陰刻された月輪下の「南」の下半と碑文上半の文字が一部不明である（拓本・写真図版 2 参照）。

石碑下端が土壙の裏込めの小礫に接し、抜かれた状況が無いことから、塚に伴うものである。倒れた状況から碑面は東向きであったと思われる。

碑文は「養男玉井氏が□野清右門妻（玉圓妙皎大姉）の供養のため享保 12 年 2 月 20 日に石塔を造立し、吉詳寺の□仙髄が華厳経の一句を読み語った」とある。

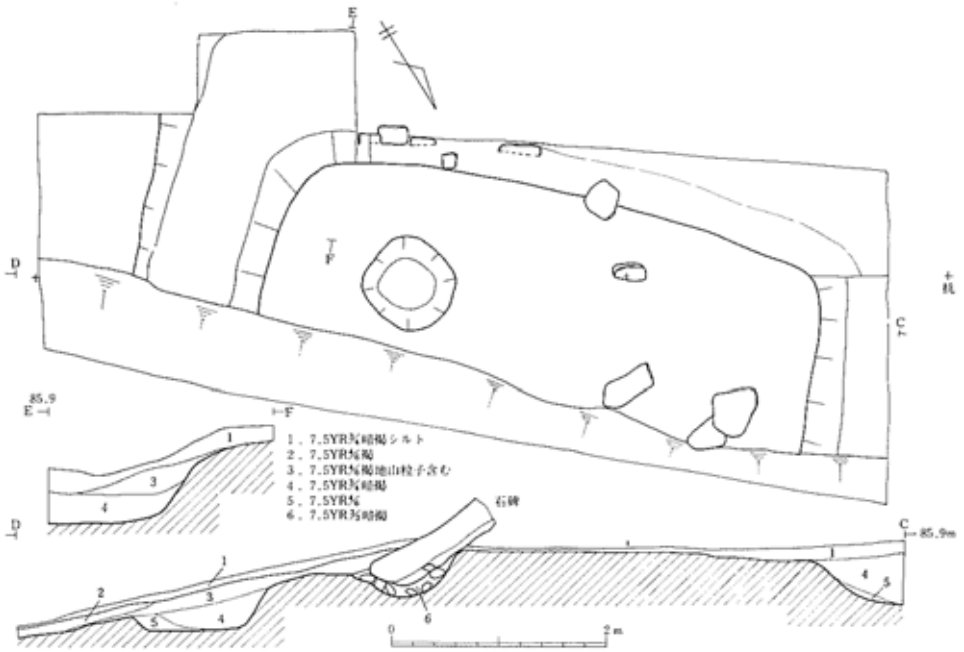
3、石碑・塚の年代と性格

医

1 号塚の石碑は卍（バン・マン）の下に南無□王如来の六字名号が彫られ、天正 9 年（1581）2 月 16 日（旧暦で春の彼岸）に立てている事から供養碑と考えられる。被追善者は不明である。

3 号塚の石碑は銘文から養男玉井氏が享保 12 年 2 月 20 日（旧暦で春の彼岸）に清右門の妻玉圓妙皎大姉のために立てた追善供養碑である。

2 基の石碑は塚に伴っており、2 基の塚は供養碑を立てるために構築したものである。塚の構築は石碑造立と同時期と考え、1 号塚は天正 9 年（1581）・3 号塚は享保 12 年（1727）と思われる。



第 4 図　3 号塚・平面・断面図

4、碑文と伝承

2 基の碑文にある氏名の中で、快順、玉圓妙皎大姉、□野清右門、□仙随、の名が『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出－中野屋敷系図』、『宮城県史－12』、『本吉町誌－Ⅱ』、馬籠大柴の佐藤家伝『藤姓佐藤家氏系図』、平柵の佐藤弘雄宅伝『佐藤家譜』・「玉圓妙皎大姉位牌」などに伝承として見られる。

1)、「□野清右門妻玉圓妙皎大姉」について本吉町教育委員会が調査した結果、馬籠平柵の佐藤弘雄宅に伝えられる『佐藤家譜』と位牌に法名（玉圓妙皎大姉）が見られた。玉圓妙皎大姉は清右衛門の妻で、享保 11 年 12 月 11 日（1726）に亡くなったと伝えられている。

平柵の佐藤家は『馬籠村風土記書出－安永 9 年』、『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出－安永 9 年』に記載されている中野屋敷の家系として伝えが残っている。位牌と石碑に見られる「玉圓妙皎大姉」が同じであれば清右衛門は『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出－安永 9 年』にある中野屋敷の五代目にあたり、銘文の□野清右門は「衛」の抜記と考えられる。

2)、3 号塚石碑の中野屋敷の家系は『馬籠村代數有之御百姓書出』・馬籠平柵佐藤家伝「佐藤家譜」で見ると、先祖は土佐信久となっている。信久は馬籠大柴佐藤家の伝「藤姓佐藤家氏系図」では「上信夫館の 10 代・佐藤信敬の五男信久」と同一人であると伝えられている。1 号塚石碑の快順は、馬籠大柴の佐藤家所蔵の伝「藤姓佐藤家氏系図」では「上信夫館の 10 代・佐藤信敬の長男」とある。

これは安永 9 年（1780）頃まで、『代數有之御百姓書出』や伝「藤姓佐藤家氏系図」に見られるように信久と快順は兄弟であり、平柵中野屋敷は馬籠邑大柴の上信夫館佐藤家から分家したとの言い伝えが残っていた様である。

佐藤家伝位牌

（一）年）
享保拾牛　天　清右衛門妻
玉圓妙皎大姉
十二月十一日

三号塚石碑

（釈文）
（中カ）　無　宝
□野清右門妻自脱夫愛以来□俗身寄三□故
（名カ）圓　念
□玉□妙皎大姉与号世話發願□仏而満五百
畢　時養　氏養　不
六十七而遊去□于□□男玉井□□母之□
（南カ）　養　暦
月輪　□　而　為施主与遠立一石之塔而伸供□之□
導　師
□拾二丁未二月廿日□　□同　村吉祥　寺
簡　圓　師
□仙□和尚而為　玉□妙皎之誦一句語□即
也　敬
□嚇□又是有　一句語三界唯一心施主白

偈の「三界唯一心」は華厳経の一句である。

5、まとめ

1、塚は斜面に沿って北西に並んでいる。残存部分から平面形は3基とも方形を基本とし、大きさは一辺6～8mである。高さは1号塚は1.5mである。なお、2・3号には周溝がある。3号塚の積み土は残っていないが、銘文と土壙埋設部分の間が30㎝あることから積み土があった可能性がある。

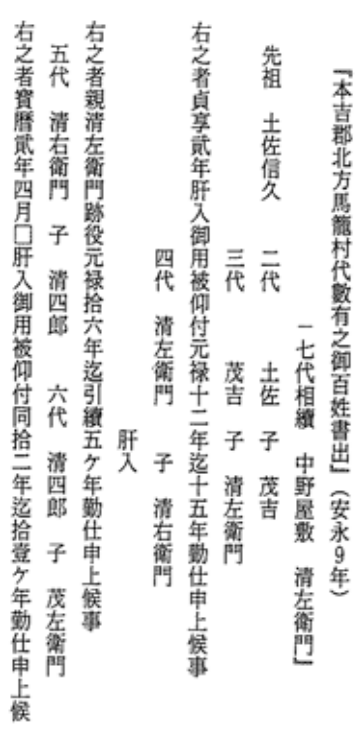
2、2基の石碑は銘文から供養碑である。1号塚は天正9年、3号塚は享保12年に碑を立てるために構築された。3号塚の石碑造立の2月20日は玉圓妙皎大姉が死亡した享保11年12月11日から100日目の彼岸にあたる（旧暦では享保12年の1月が閏月である）。これから3号塚の石碑は玉圓妙皎大姉の100カ日の忌日に立てられた追善供養碑である。2号塚は形状・西辺の長さ・大きさ・方向が3号塚に類似し、1、3号塚の間にある事から江戸時代の供養塚の可能性がある。

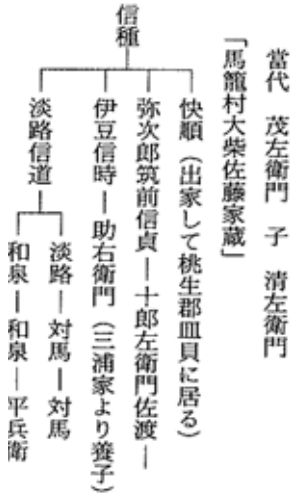
3、『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出－安永9年』にある中野屋敷の家系と馬籠大柴の佐藤家伝『藤姓佐藤家氏系図』の伝えから中野屋敷（土佐信久）と快順の係わりが考えられる。また、2号塚を含めてこの地域の塚はおよそ120年同族と伝えられる佐藤家の供養の場所とされていた可能性がある。塚も3基以上あったものと思われる。

注

1、□野清右衛門は『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出』、『本吉町誌』に記載があり、馬籠村中野屋敷の五代・清右衛門（元禄禄12年（1699）～同16年（1703）まで肝入）と伝えられている。

2、佐藤氏は葛西氏滅亡（天正19年）後、上信夫館の11代の佐藤信貞は馬籠邑大柴・弟の信時は馬籠邑大東に帰農したと伝えられている。


『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出』（安永9年）
－七代相續　中野屋敷　清左衛門」
先祖　土佐信久　二代　土佐　子　茂吉
三代　茂吉　子　清左衛門
右之者貞享貳年肝入御用被仰付元禄十二年迄十五年勤仕申上候事
四代　清左衛門　子　清右衛門
肝入
右之者親清左衛門跡役元禄拾六年迄引續五ケ年勤仕申上候事
五代　清右衛門　子　清四郎　六代　清四郎　子　茂左衛門
右之者寶暦貳年四月□肝入御用被仰付同拾二年迄拾壹ケ年勤仕申上候事
當代　茂左衛門　子　清左衛門
」



引用・参考文献

1. 本吉町誌編纂委員会（1982）：『本吉町誌Ⅱ』
   a 「金石史」
   b 『本吉郡北方馬籠村代數有之御百姓書出』（安永9年）
   c 「書出・曹洞宗如意輪山吉祥寺－安永9年－」
   d 『馬籠村風土記御用書出』（安永9年）
2. 宮城県史刊行会（1987）：『宮城県史12』
   馬籠大柴佐藤家所蔵「藤姓佐藤氏系図」
3. 宮城県教育委員会（1981）：『歴史の道調査報告書・涌谷－登米道』
4. 宮城県教育委員会（1993）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財報告書』第152集
5. 馬籠平椚佐藤家伝「佐藤家譜」

若 宮 遺 跡

1、はじめに

遺跡は志津川町戸倉字若宮に所在する。町南東部の志津川湾に面した半島（通称戸倉半島）北側に位置し、標高 26～25mの小丘陵鞍部に立地している（図－1)。

半島北側には縄文時代･平安時代の包含地､中世の館跡･経塚などの遺跡が確認されている(図－2)。このうち縄文時代の遺跡は半島の西側に多く確認されており､やや広い入り江に面した丘陵斜面に津の宮・近東・波伝谷遺跡、河川流域の丘陵斜面に在郷・大畑遺跡が立地している。

若宮遺跡では、平成 3 年に国道 398 号の歩道工事で遺跡の南側丘陵が削平された際、道路法面（杭№91～№92）の黒褐色土から縄文式土器，礫石器（磨石・凹石）が確認された（写真図版－2・14～21)。

杭№88～№91 の表土を除去した結果、沢の東側斜面の 2 層から縄文時代中期の土器,石器などが出土した。層の厚さは 10～15 ㎝で、暗褐色（10ＹＲ4/4）である。土器を含む範囲は調査区東側（№90＋50～№91）の約 60 ㎡である。2 層下で遺構は認められなかった。

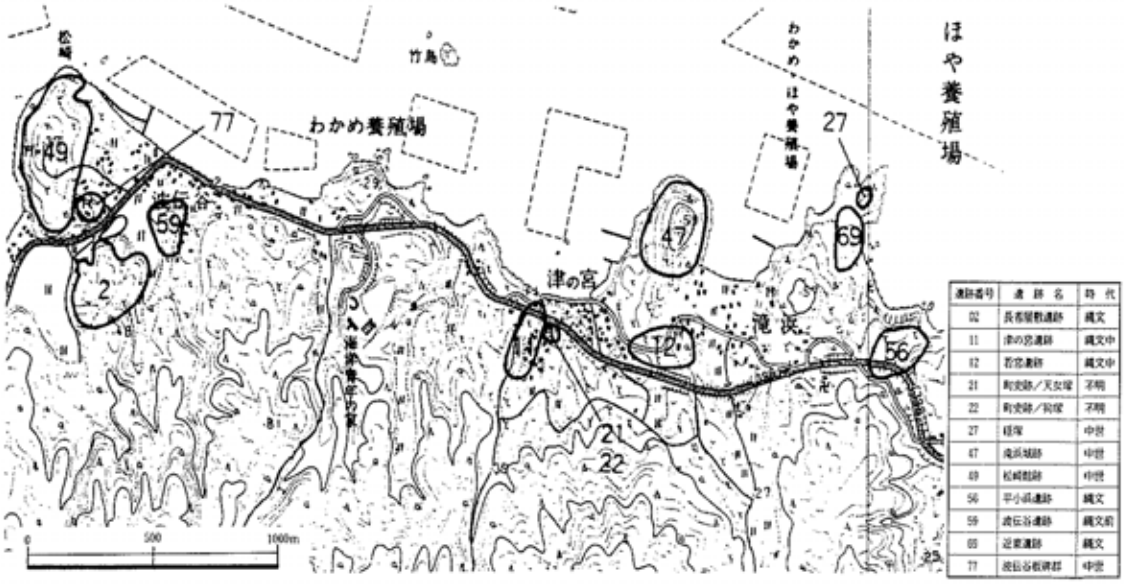
2、発見された遺物

調査の結果、堆積層から縄文時代中期の土器・石器（石斧・石棒・石鏃・磨石・凹石・石皿）が出土した。

1）縄文土器

器種には浅鉢（口縁部 1・17・18）と深鉢（口縁部 2～16・19・20、胴部 21～29）が見られる。いずれも破片で全体の器形は分からない。

第 1 図　遺跡地形図



遺跡番号	遺 跡 名	時 代
02	長者屋敷遺跡	縄文
11	津の宮遺跡	縄文中
12	若宮遺跡	縄文中
21	町史跡／天女塚	不明
22	町史跡／狐塚	不明
27	経塚	中世
47	滝浜城跡	中世
49	松崎館跡	中世
56	平小浜遺跡	縄文
59	波伝谷遺跡	縄文前
69	近東遺跡	縄文
77	波伝谷板碑群	中世

第 2 図　周辺の遺跡

口縁部

1・2 は隆沈線・沈線による横位の渦巻き文である。2 の地文は縄文（ＬＲ）である。

3〜7 は隆沈線の横位（渦巻き＋楕円）文である。3・4 は口縁が無文で肩部に文様があり、5・6・7 は口縁に文様があるもの。区画内の地文は3 が縄文（ＬＲ）で、5〜7 が縄文（ＲＬ）である。

8・9 は隆沈線の縦位渦巻文である。

10・11 は口唇下に横位の沈線があり、口縁上半から胴部にかけて隆沈線による縦位（渦巻き＋楕円）文の上半部が見られる。区画内の地文は縄文（ＬＲ）である。

12・13 は口縁が無文で、頚部から胴部に調整沈線の縦位楕円文と「∩文」が横に配置される。区画内の地文は縄文（ＲＬ）である。

14 は横位沈線と 2 段に横位の連続刺突文がある。

15 は頚部と胴部に横位と縦位の隆文で方形状の区画がされ、頚部の横位隆線に刺突が見られる。地文は縄文（ＲＬ）である。

16 は頚部に横位の刺突隆沈線があり、口縁部・胴部の地文は無文である。

17・18・19・20 は頚部に調整隆線文が巡り、17 は口縁部・胴部が無文である。18 の地文は縄文（ＲＬ）で、19・20 の地文は縄文（ＬＲ）である。

胴部

21 は 2・3 本の沈線による渦巻きと懸垂の連結部で地文は縄文（ＲＬ）である。22・23 は横位の大きい懸垂の渦巻きと小形渦巻きの連結部で、22 の地文は縄文（ＲＬ）で、23 の地文は縄文（ＬＲ）である。

24・25 は隆沈線の渦巻きと懸垂の連結部で地文は縄文（ＲＬ）である。

26 は隆沈線による縦位渦巻き文で、区画内の地文は縄文（ＬＲ）である。

27 は調整沈線 2 本による楕円文である、区画内の地文は縄文（ＬＲ）である。

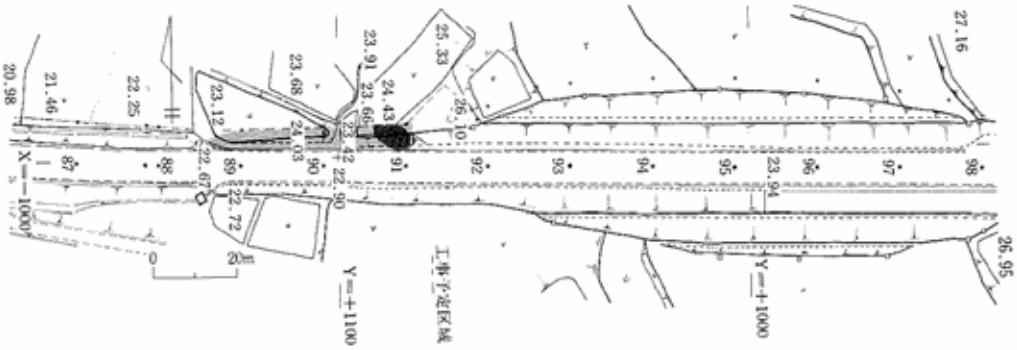
28 は一本の線による縦位の「∩文」である。

29 は縦位の連鎖状隆線文で、地文は撚糸（ＬＲ）である。

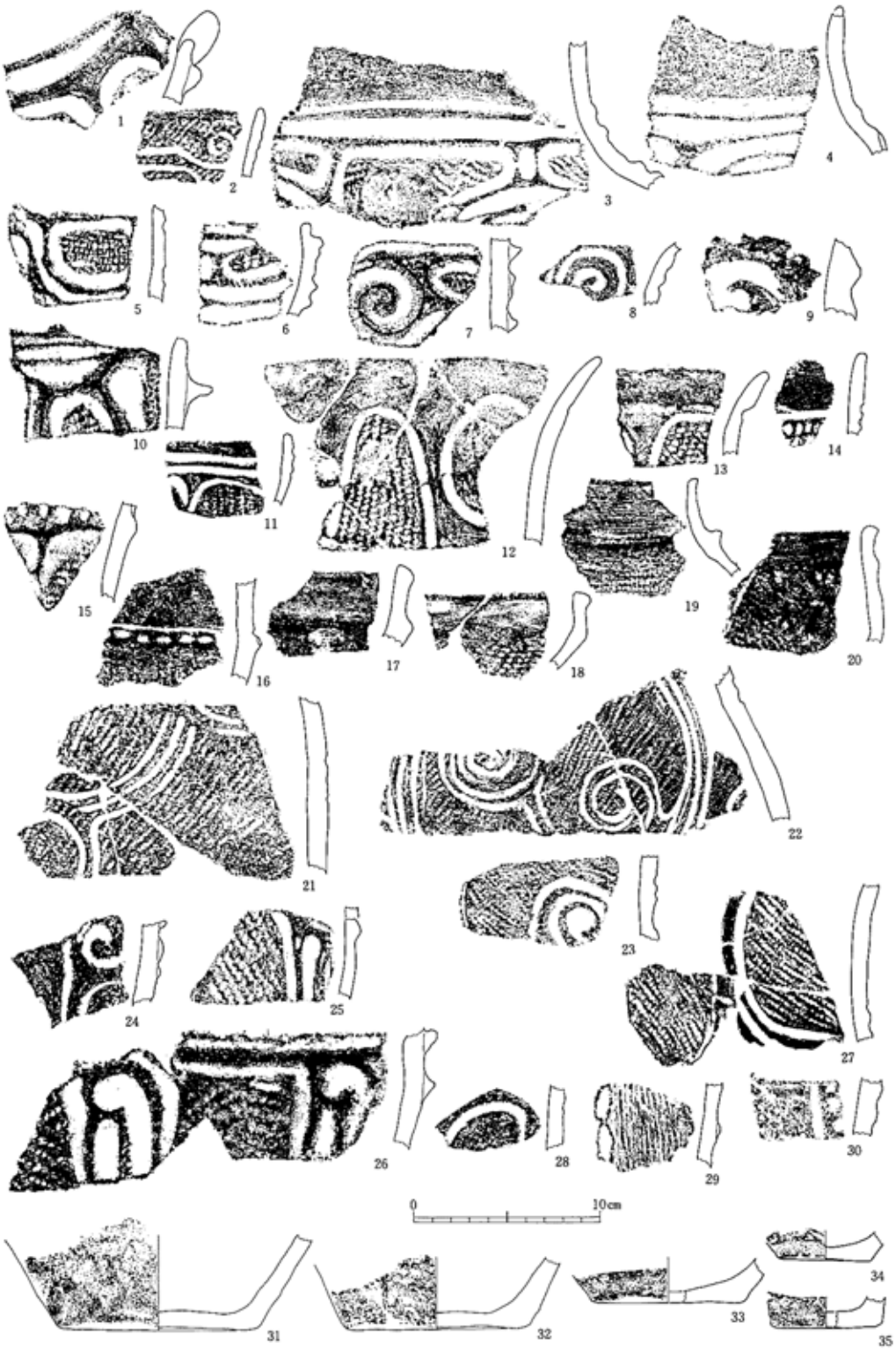
30 は縦位の連続刺突付き隆沈線である。

底部

12 点ある。底径は 5〜12 ㎝のものが見られる。底部から斜めに立ち上がるもの（31〜34）、ほぼ垂直に立ち上がるもの（35）がある。



第3図　調査区の現況図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
10cm
31
32
33
34
35

第4図　2層出土土器

2）石器

石斧・石皿（台石）・敲石・磨り石・石棒・石鏃が出土している。

ａ）石棒（第５図－2）

頭部は丸く、頸部が括れて先端にかけて徐々に細くなっている。断面は頭部はやや偏平で、胴部は楕円形状をしている。研磨面と擦痕の幅がほぼ一致し、細い研磨擦痕が認められる。破損しているが、研磨は全体に及んでいたと思われる。

ｂ）磨製石斧（第５図－1）

基部中央から刃部が残っている。全体的に研磨され、中心軸に対し斜め方向の擦痕が認められる。擦痕と研磨面の幅がほぼ一致している。刃部の片側が磨滅しており、こまい破損が見られる。

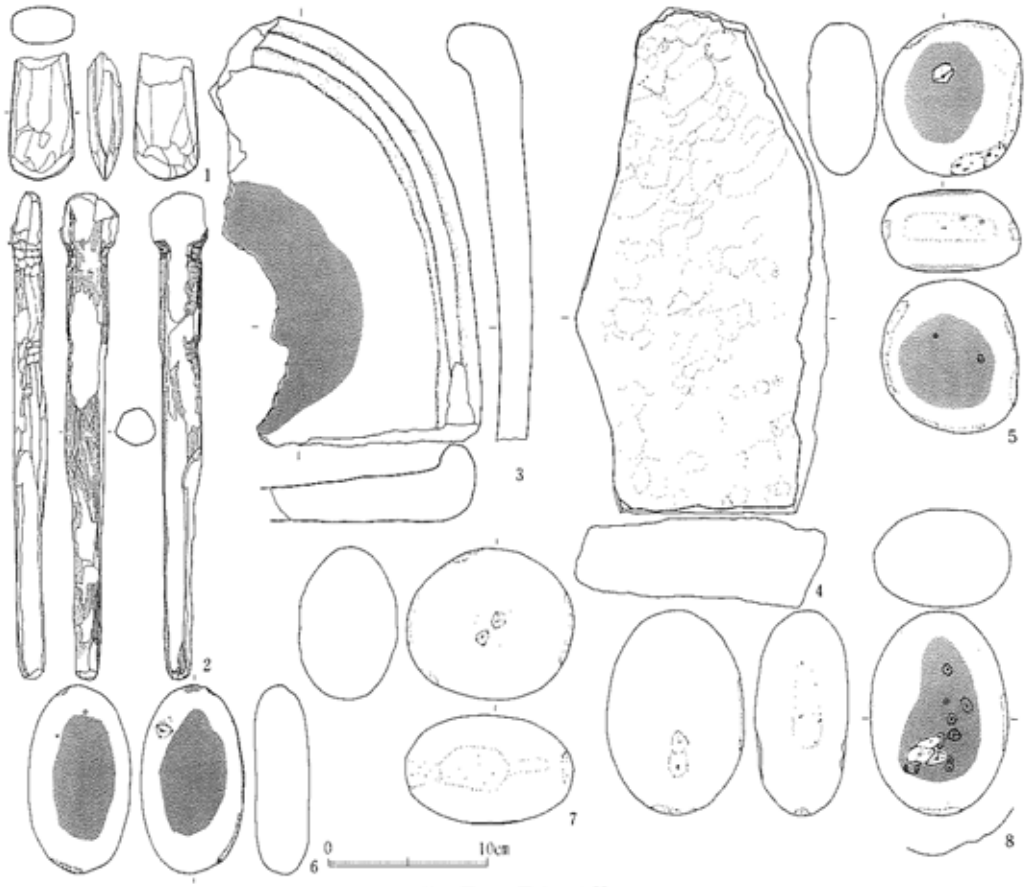
ｃ）石皿（第５図３・4）

3 は有縁のもので約四分の一が残っている。形態は楕円形になると思われる。縁は上端がやや平らである。使用痕は上面の中央付近にやや彎曲した滑らかな面がみられる。

4 は無縁のもので完形である。形状は台形でやや左中央が角張っている。上面はやや彎曲した面である。全体に敲打のため不整形な浅い窪みがあり、窪みの間は滑らかである。台石として使用された可能性がある。

ｄ）敲石（くぼみ石）（第５図5～8）

形態は楕円形、使用痕は敲打痕と研磨面が見られる。



第５図　２層出土土器

5、6 は両面に磨面、片面に敲打痕による窪み、周囲に細い敲打痕などが見られる。7 は片面に敲打痕による窪み、周囲に細い敲打痕がのこる。8 は表・裏に敲打痕による窪み周囲に敲打跡、表に磨面が認められる。

ｅ）磨り石（写真 10、11、12、13）

形態は楕円形、使用痕は研磨痕が見られる。

ｆ）石鏃（6 図）

基部に浅く抉りが入り脚部が鋭く尖るもの。石材は黒曜石である。

第 6 図　石鏃

3、土器の特徴と年代

前述した文様の特徴と同様な特徴のある土器が出土している遺跡と比較して時期についてみてみる。

口縁部

1・2 は横位渦巻き文（隆沈線・沈線））、3・4・5・6・7 は横位渦巻き楕円文（隆沈線）、8・9 は縦位渦巻き文（隆沈線）主体の文様の一部である。1・2 は勝負沢遺跡・中の内Ｂ遺跡の浅鉢・深鉢の口縁部に、3 は中の内Ｂ遺跡（1 住）の深鉢肩部に、4・5・6・7 は上深沢遺跡の深鉢の口縁部、肩部に、8・9 は勝負沢遺跡・中の内Ｂ遺跡の深鉢・浅鉢口縁部などの文様などに見られる。1～9 は 3 遺跡で大木 8ｂ式にされているものに相当する。

10・11 は縦位渦巻き楕円文（隆沈線））、12・13 は「∩文」＋円文（沈線）の文様の一部である。10～13 は上深沢遺跡の深鉢の口縁部・胴部などの文様などに見られ、大木 9 式にされているものに相当する。

14・15 は刺突があること、15 の隆線による方形区画は六反田遺跡の深鉢Ⅶ類に類似し、大木 10 式にされているものに相当する。

17・18・20 は口縁部と胴部の間に隆線があるもので、大木 8・9・10 式期の何れの時期にもみられるものである。

2　胴部

21・22・23 は曲流渦巻き文（沈線）、24・25 は渦巻き文と懸垂文の接続部分である。21～25 は勝負沢遺跡・中の内Ｂ遺跡の深鉢の胴部に見られ、大木 8ｂ式にされているものに相当する。

26 は縦位渦巻き文（隆沈線）で、27 は縦位楕円文（隆沈線）、28 は「∩文」（沈線）であり、26～28 は上深沢遺跡などで大木 9 式にされているものに相当する。

29・30 は縦位の連鎖状・刺突隆線文で、六反田遺跡の深鉢Ⅶ類のなどに見られ、大木 10 式にされているものに相当する。

これらの土器は出土地点にまとまりがなく層中で面をなさない。土器は全て破片で大木 8・9・10 式期のものを含むことなどから緩斜面に流れ込んで再堆積したものと思われる。

石器

石器は前述した土器と 2 層中から混在して出土していることで、時期は大木 8ｂ式～大木 10 式に含まれるものにしておく。

ま と め

1、口縁部・胴部のほとんどは上深沢遺跡・勝負沢・中の内Ｂ遺跡で大木 8ｂ式、大木 9 式、大木 10 式にされているものに相当する。
2、西斜面の遺物は出土地点にまとまりがなく層中で面をなさない、土器は全て破片で大木 8・9・10 式期のものを含むことなどから緩斜面に流れ込んで再堆積したものと思われる。

参考文献

伊藤　裕志（1987）:「中の内Ｂ遺跡」『宮城県文化財報告書』第 121 集
丹羽・阿部・小野寺（1982）:「勝負沢遺跡」『宮城県文化財報告書』第 83 集
宮城県教育委員会（1978）:「上深沢遺跡」『宮城県文化財報告書』第 52 集
田中則和（1981）:「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財報告書』第 34 集
宮城県教育委員会（1993）:「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財報告書』第 152 集

写 真 図 版

1号・2号塚
(昭和55年9月)

1号・3号塚
(昭和55年9月)

1号塚

町頭写一1

3号塚表土除去

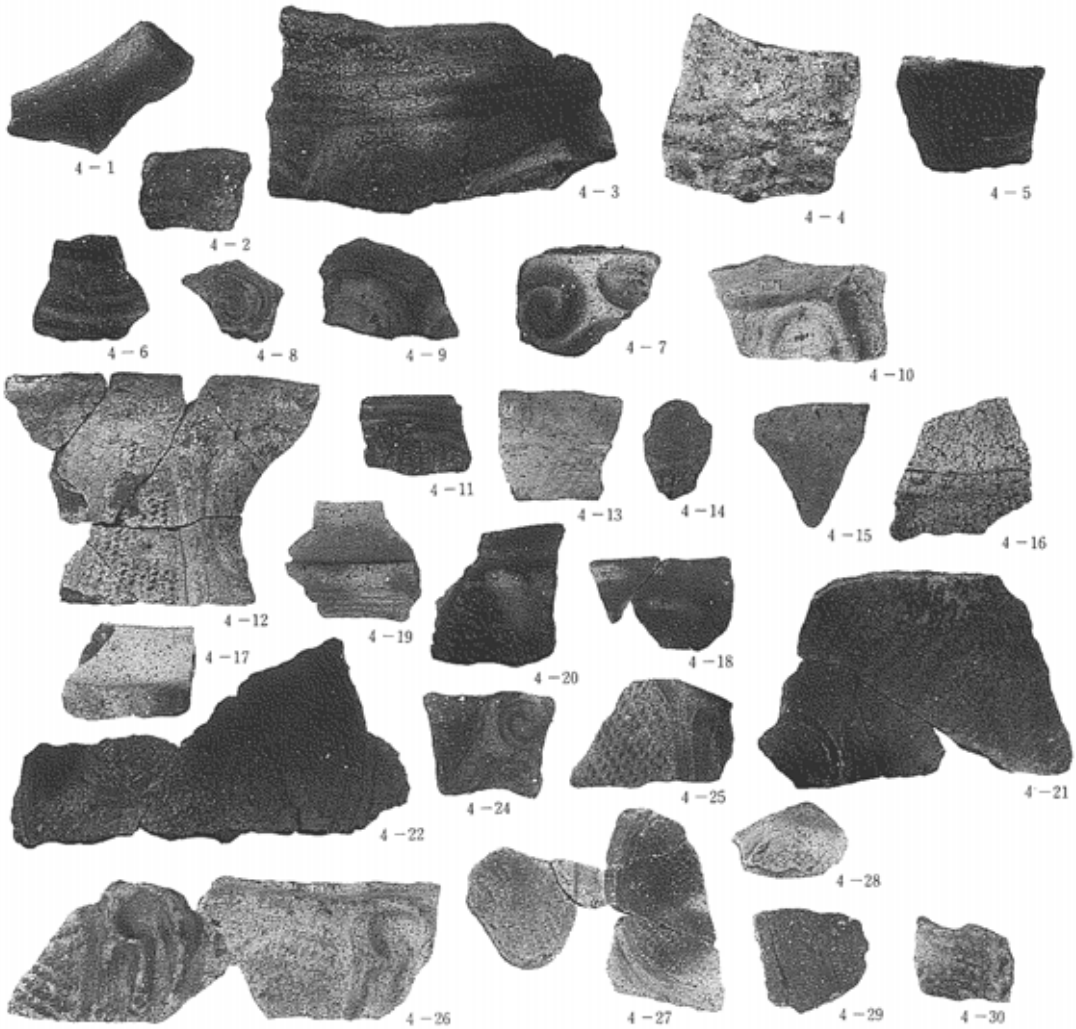
石碑

3号塚基底部

3号塚北側周溝

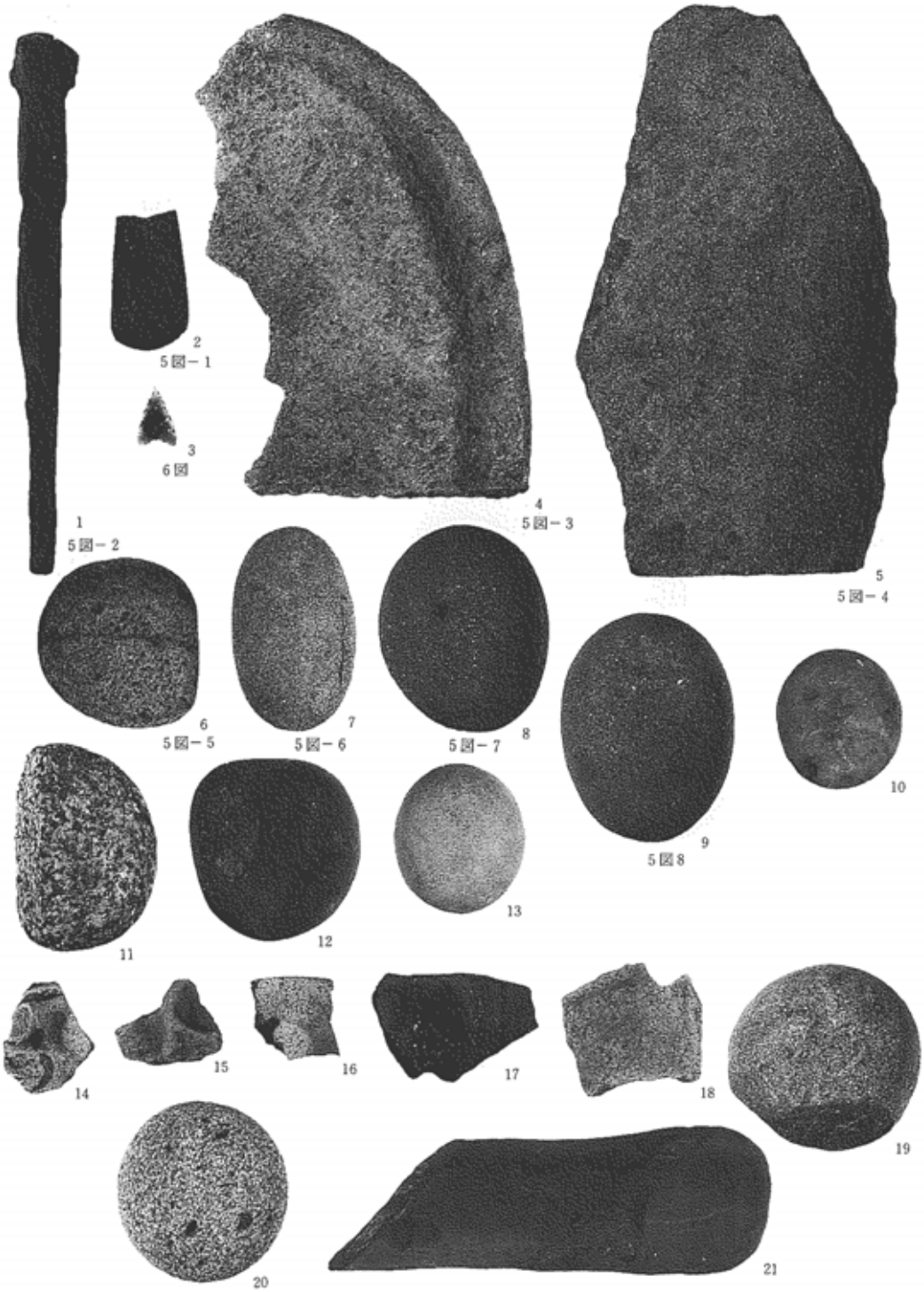
町頭写―2

調査状況



2 層出土土器　　（第 4 図と対象）

若宮写―1



1～13．2層出土石器　14～18．表土土器　19～21．表土石器
1．石棒　2．石斧　3．石鏃
4・5．石皿．石台　6～9．敲石　11～13．すり石
19．すり石　20．すり石　21．砥石

若宮写－2

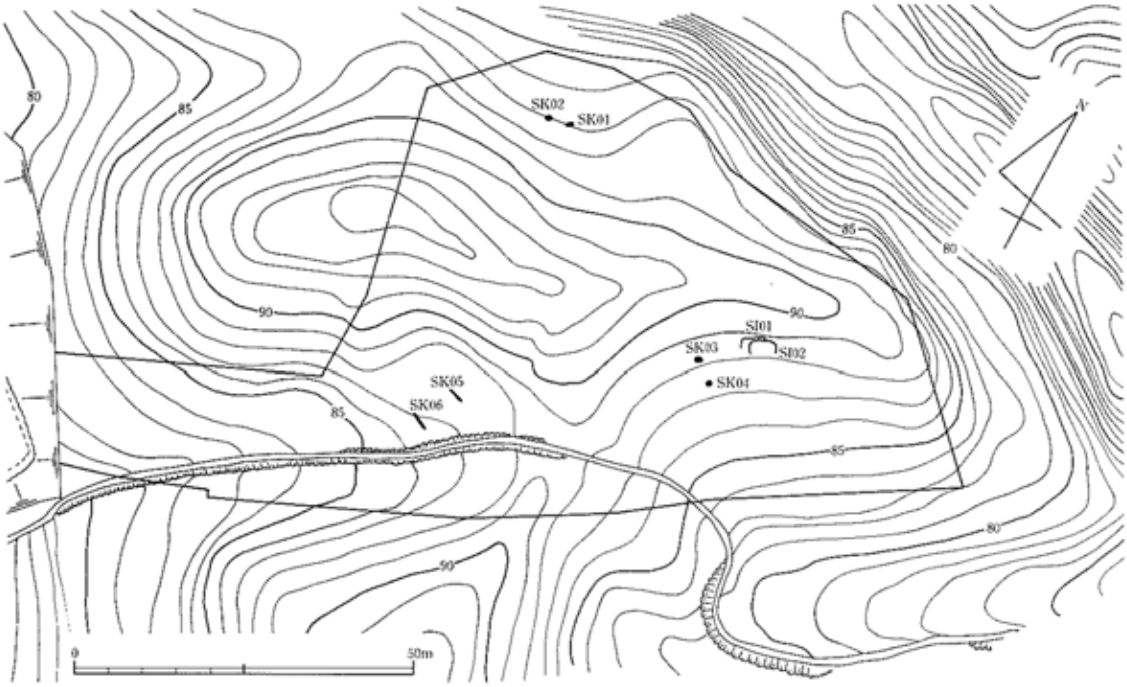
大学町北遺跡

1　はじめに

本遺跡は玉造郡岩出山町字大学町に所在する。町内を南東に流れる江合川の東西両岸には標高 50～120mの丘陵が連なり、旧石器時代から近世までの多くの遺跡が存在する。本遺跡は西側の丘陵の先端部に立地し、沢を挟んだ南側には伊達政宗が一時居城としていた岩出山城が存在する（第１図）。

今回の調査は町道城山西廻線建設工事にともなう事前の発掘調査である。当該地は岩出山城に隣接しており、立会調査の結果、縄文時代の遺構と遺物が発見されたため、新発見の『大学町北』遺跡とし、平成５年 12 月と平成６年１月に急遽発掘調査を実施したもので、調査面積は約 4500 ㎡である。

第１図　位置図



第２図　調査区

2　調査の成果

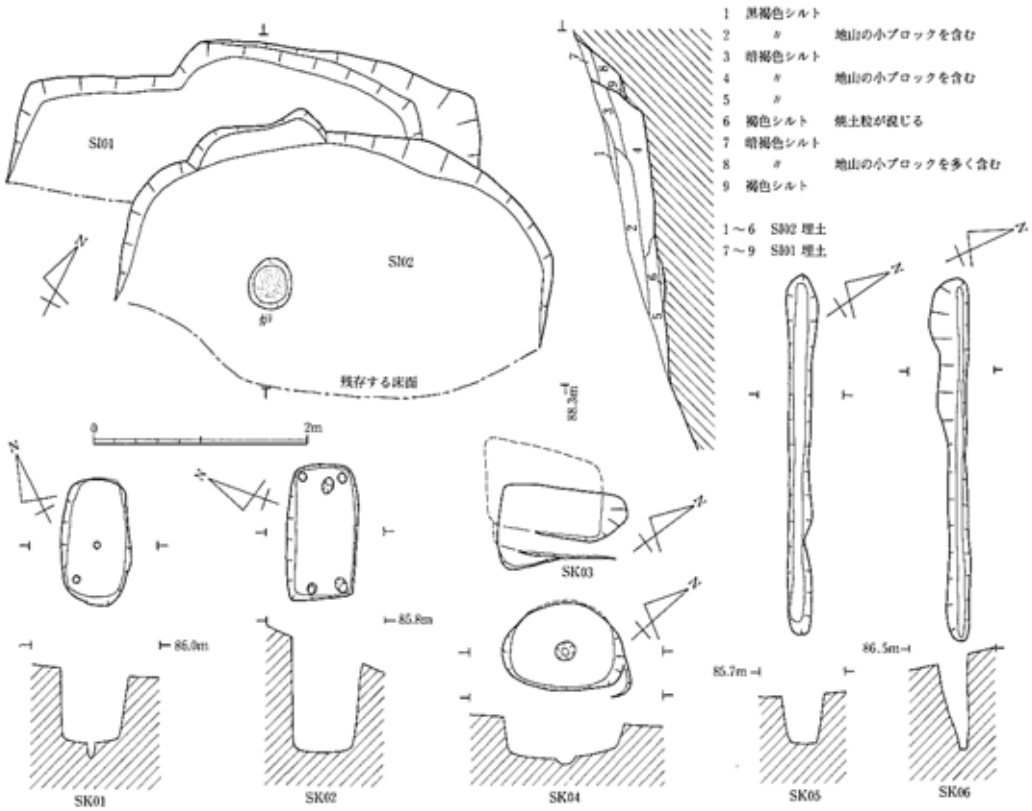
調査は東西に延びる標高 95m程の細長い尾根とその北・南・西斜面を対象として実施し、北斜面で落し穴 2 基、南斜面で竪穴住居跡 2 棟と落し穴 2 基、西斜面で落し穴 2 基を検出した。これらはいずれも尾根からやや下った場所の、それぞれの沢頭部分に立地している（第 2 図)。落し穴の詳細については一覧表を参照していただきたい(表 1)。

北斜面のやや傾斜が緩くなった部分で落し穴 2 基(ＳK01･02)を検出した。これらはほぼ同規模で、長軸の方向は異なるものの東西に並んでおり、両者の間隔は約 3mである。この付近の表土から縄文土器が出土した(第 4 図 8・9)。

調査区の中では最も傾斜が緩い南斜面で竪穴住居跡 2 棟と落し穴 2 基(ＳK03･04)を検出した。落し穴は竪穴住居跡の西側約 7mにあり、長軸の方向はやや異なるものの南北に並んでおり、両者の間隔は約 4mである(第 2 図)。

ＳＩ01 住居跡：斜面上方の住居北側が残存しており、南側はＳＩ02 住居跡に壊されている。平面形は隅丸方形と思われ、東西 3.7m、南北 1.2m以上である。壁はやや緩い角度で立ち上がり、高さ 0.4mである。床面は平坦で、周溝や壁柱穴などは検出されなかった。埋土は地山の小ブロック混じりの暗褐色土などである(第 3 図)。出土遺物はない。

ＳＩ02 住居跡：住居北側が残存している。平面形は隅丸方形と思われ、東西 4.0m、南北 2.4m以上



第 3 図　発見された遺構

である。壁はやや急角度で立ち上がり、高さ 0.4mである。床面は平坦で、西に寄って炉がある。炉は浅い皿状の地床炉で、直径 0.5mほどの円形である。埋土は上部が砂質の黒褐色土で、下部が地山の小ブロック混じりの暗褐色土などである(第3図)。

埋土から縄文土器、石器が出土した(第4・5図)。縄文土器は胎土に繊維を多量に含むもので、外面に縄文、内面に条痕文が施されたものが多い(第4図1～4)。石器には石鏃（第5図1)、楔形石器(2～4)、箆状石器(5)、磨石（10・11）などがある。

なお、この場所では地山の上部が地すべりのために南東方向にずれており、竪穴住居跡や落し穴の平面形が乱れている。

西斜面の傾斜が緩くなった部分で落し穴2基(ＳK05・06)を検出した。これらはほぼ同形・同規模で、南北に並んでおり、両者の間隔は約7mである(第2図)。

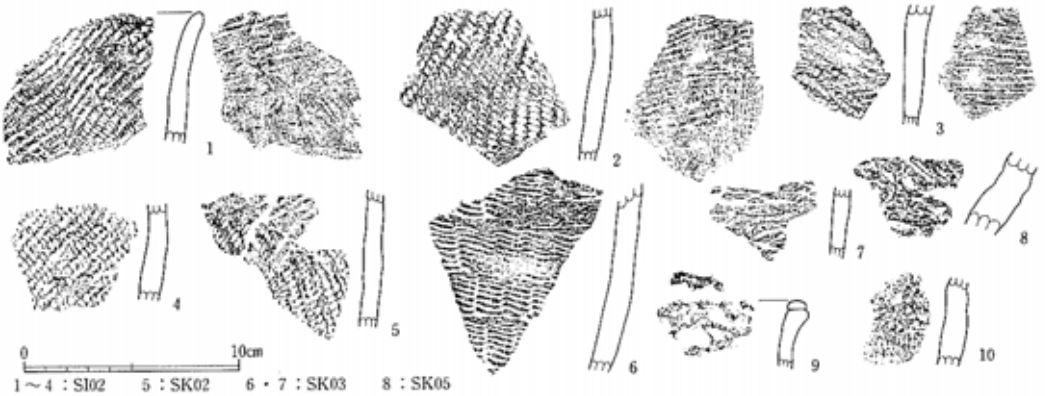
	平面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	備考		平面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	備考
ＳK01	隅丸長方形	1.1×0.6×0.7	黒色土		底面中央と隅に小ピット	ＳK04	楕円形	1.1×0.6×0.3	黒色土		底面中央に小ピット
ＳK02	長方形	1.2×0.6×1.1	黒色土	縄文土器	底面四隅に小ピット	ＳK05	細長い楕円	3.2×0.2×0.8	黒色土	縄文土器	
ＳK03	隅丸長方形？	1.2×0.6×0.4	黒色土	縄文土器		ＳK06	細長い楕円	3.4×0.2×0.5	黒色土		

3　まとめ

検出された遺構は竪穴住居跡と落し穴である。ＳＩ02 竪穴住居跡からは、胎土に繊維を多量に含み、外面に縄文、内面に条痕文が施された土器が出土した。これらは同町座散乱木遺跡(石器文化談話会：1978)出土土器などと同じであり、縄文時代早期末に位置づけられる。ＳＩ01 竪穴住居跡は出土遺物がなく時期を限定できないが、埋土がＳＩ02 竪穴住居跡と同様の特徴であることから、ほぼ同時期と考えておきたい。

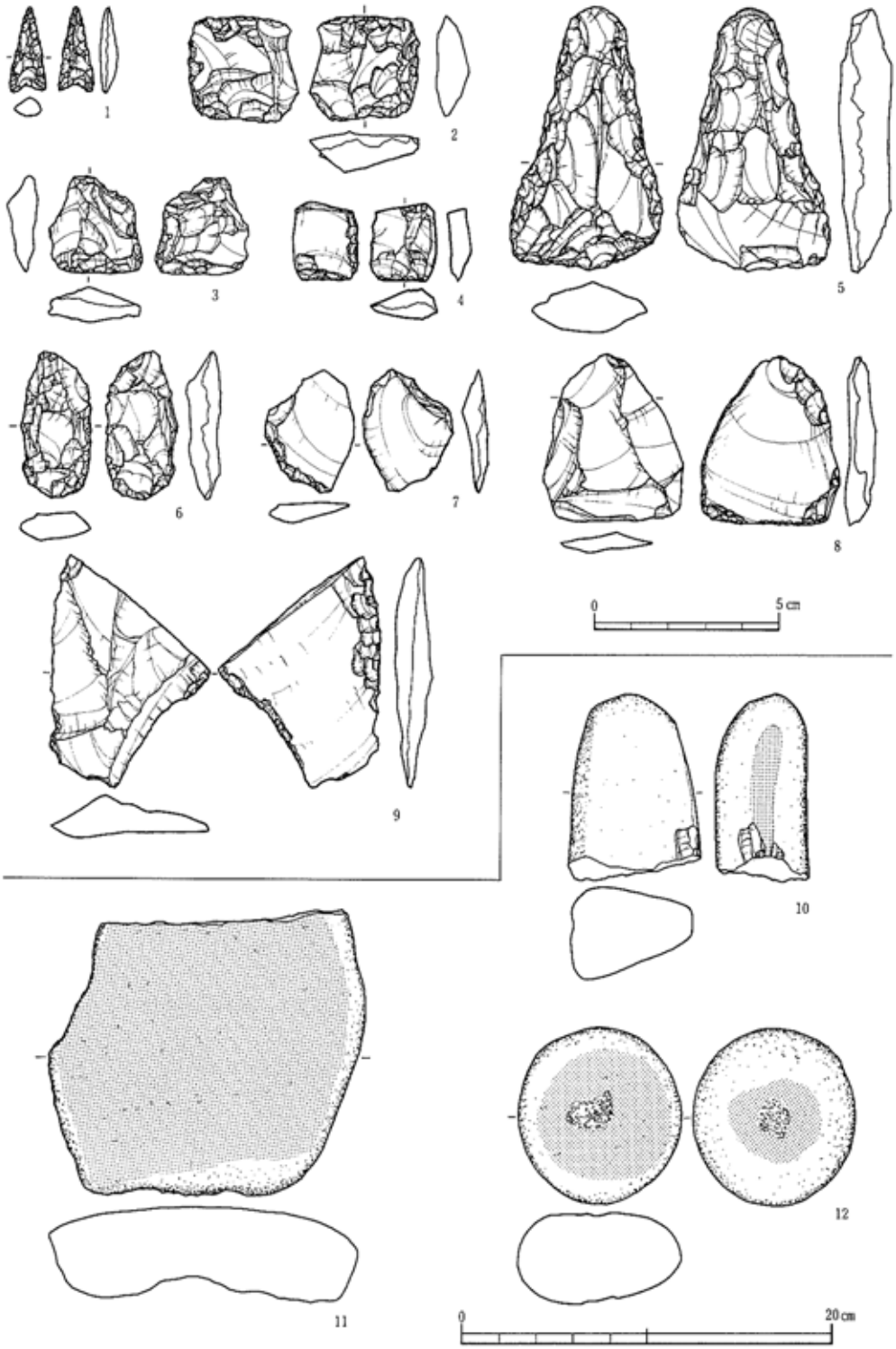
落し穴は沢頭で2基ずつ近接して存在しており、規模や構造が似ていることから、それぞれセットで存在した可能性が強い。一方、ＳK02・03・05 からは、いずれも胎土に繊維を多量に含み、外面に縄文や撚糸文が施された、早期末～前期初頭頃と思われる土器が出土していることから、落し穴の年代はそれ以降と考えられる。

参考文献　石器文化談話会（1978）：「座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅰ」石器文化談話会誌第1集



1～4：SI02　5：SK02　6・7：SK03　8：SK05
9・10：A区表土

第4図　出土土器



1：石鏃　2～4：楔形石器（同一母岩　2と3は接合）　5：篦状石器　7～9：スクレーパー
10・11：磨石（10は所謂特殊磨石）　12：磨・凹石

第5図　出土土器

台町西遺跡

調査の概要

本遺跡は栗原郡高清水町字台町に所在する。標高 35m前後の東西に延びる丘陵の南斜面に立地し、東側には向野Ａ遺跡が、南側には松ノ木沢田Ａ遺跡(千葉：1981、三好：1993)が存在する。

今回の調査は町道改良工事にともない、掘削される丘陵部分を対象として、平成 6 年 2 月と 7 月に実施した(第 1 図)。調査面積は約 400 ㎡である。

調査の結果、竪穴住居跡 1 棟と近世以降の墓多数を検出した(第 2 図)。後者には墓石が残っているものもあり、調査は実施しなかった。なお、これらからは刀子･キセル･寛永通寶などが発見された。

竪穴住居跡は近世墓に壊されており、さらに南側が削平されている。平面形は方形で、規模は東西が約 3.3mであり、南北が 2.7m以上である。壁は最も残りの良い部分で高さ 25 ㎝である。床面は平坦で、ほぼ中央に幅 40 ㎝ほどの焼面がある。埋土は地山の小ブロック混じりの暗褐色土などである。

埋土から少量の土師器坏と甕が出土しており、いずれも小破片で図示できない。坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整されたもの、内外面ともヘラミガキされたものとがある。

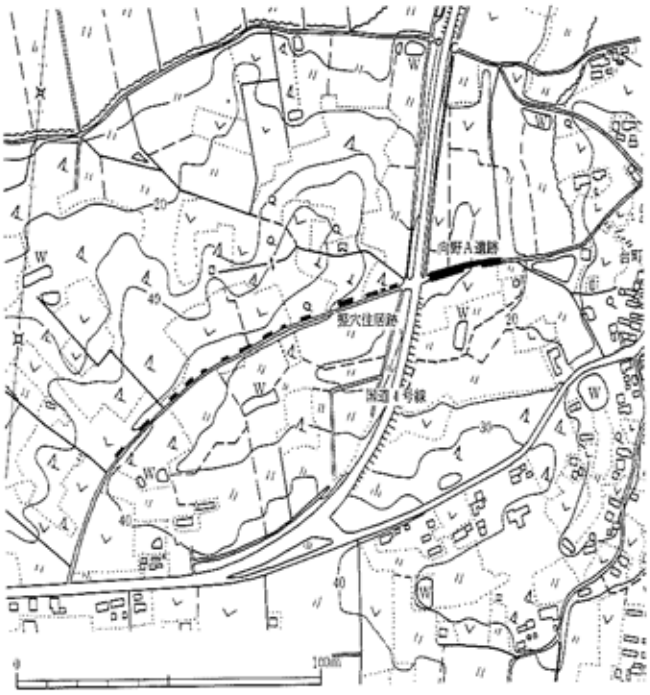
年代は、奈良～平安時代の土器が混在しているが、概ね平安時代のものと考えておきたい。

なお、調査区は丘陵の縁辺部にあたる。奈良～平安時代の遺物があることから、斜面上方にはこの時代の他の竪穴住居が存在すると思われる。

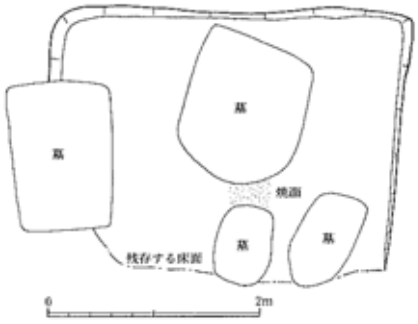
参考文献

千葉宗久（1981）：『松ノ木沢田遺跡』『向野Ａ遺跡』「東北地建バイパス関係遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第 76 集

三好秀樹（1993）：『向野Ａ遺跡』「狐塚遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第 157 集



第１図　調査区



第２図　竪穴住居跡

石堂Ｂ遺跡他

調査の概要

石堂・石堂Ｂ・戸谷沢遺跡は白石市大鷹沢字石堂、字戸谷沢に所在し、白石市の東南部の角田市、丸森町と境を接する付近にあり、標高 200m程の丘陵上に位置する（第１図）。

これらの遺跡を通過する農道の改良工事にともない確認調査を実施した。その結果、石堂・戸谷沢遺跡では工事対象地内には遺構・遺物とも発見されなかったが、石堂Ｂ遺跡では縄文土器・石器が出土したため、市教育委員会とともに平成６年７月 25 日～7 月 28 日に事前調査を実施した。発掘面積は約 600 ㎡である。

第１図　位置図

調査の結果、南へ緩やかに傾斜する自然の落込みを検出し、遺物はその堆積土中より出土することが明らかになった。落込みは幅 7mほどで、最も厚い部分で 70 ㎝ほどである。この他には遺構は発見されなかった。遺物は縄文土器と石器が整理用コンテナで１箱ほど出土した。土器はいずれも小破片であり、胎土に繊維を多量に含むものである。内外面に条痕文が施されたもの（第２図１・2）、外面が縄文のもの（3・5）、撚糸文のもの（4）などがあり、縄文時代早期末～前期初頭頃のものと考えられる。石器には石匙、石箆、掻器、剥片などがある。他に表土から中期初め頃の土器が出土した（6）。

なお、本遺跡の中心部は調査区北側の斜面上方部と考えられる。

第２図　出土土器